くノ一調教日記

アアああ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カグラ達をいじめる様子を淡々と書いた日記という体のなにかです。

手慰みに書いたもの。

よければ読んでやってください。

目次

くノ一調教日記
くノ一調教日記・焔 1
くノ一調教日記・雅緋 10
くノ一調教日記・雪泉 23
くノ一調教日記・飛鳥 37
くノ一調教日記・夜桜 51
くノ一調教日記・日影 62
くノ一調教日記『追記』
くノ一調教日記・焔『追記』 72
くノ一調教日記・雅緋『追記』 83

くノ一調教日記
くノ一調教日記・焔

●月●日。

久方ぶりに日誌を記すことにした。
理由は特にない。
気が向いたから、興味がわいたから。
一日という短い時間の記録をとる。その真似事をしてみようと思った。
あまり長くは続かないであろうが、新たに購入した手帳が埋まるくらいは続けたいものである。

●月●日

女を一人捕らえてきた。
名前は焔（ほむら）という。
現代社会の闇に住まい、今尚忍をしていた女だ。
前々から所望していたくノ一が、闇の市場を通して手に入った、というわけだ。
気性は荒く、暴力的。粗野な女だが、その方が都合がいい。
丁度手帳に書き込む内容もなかったので、これから暫くはこの女を弄ぶ様子を記していこうと思う。

●月●

呪術師が焔の膂力と忍の力を封じ込めることに成功したらしい。
その道で高名なくノ一といえど、鍛え上げられた肉体も、妖しい忍術も使えなければただの少女。

その豊満な肉付きの身体をこれからたっぷり楽しめるようになった、というわけだ。
なので本日はひたすら乳房を弄ることにした。
しがない商家の子息であるが、女をよがらせることにはそれなりの自信がある。
己の欲の赴くまま、豊満な乳房を弄り、女を立派な性奴隷に仕立てよう。
先ずは着ていた服を剥ぎ取る。
手枷と足枷を嵌め、繋がった鎖で焔の身体を吊るし上げる。
両腕を持ち上げられ焔の、豊満な乳房が露になった。
日焼けした褐色の肌と、淡い桃色の乳首が私の劣情を駆り立てる。
晒された乳頭を摘まむ。こねる。軽く爪を立て、痛みを与える。
気の向くまま二つの乳房を弄ぶ。
焔は声を荒げて罵倒する。
卑怯ものだとかドスケベだとか、己の身体を弄ぶ私を言葉の限り罵り続ける。
その声に嬌声が混じり始めたのは、半日ほど時間が経った後だった。
休み無く与えられた刺激に耐えられなくなってきたらしい。
怒りと憎しみと、快楽。
入り組む感情が表れてきた所で今日はおしまいにしよう。
時間はある。早々に終わらせてはつまらない。ゆっくり楽しむことにした。

●月●日

調教開始一日目。
取り敢えず後六日ほど、乳首や大きな乳房を責め続けてみることにした。
少しずつ、丁寧に開発を続ける。
暫くは日誌に書くことには困らなさそうだ。

本日は道具を使うことにした。
といっても特殊なものではない。
白髭の筆。それを用いて乳房を責める。
昨日とは違う、柔らかくこそばゆい感覚に焔は唇をつぐんで耐えていた。
口を開けば喘いでしまうと学んだからだろう。
優しく撫でるように、乳頭をくすぐられ女の太ももに力が入っていた。
股から溢れだし、足を伝って垂れる雫を筆で掬い、よく染み込ませて乳首を撫でる。
焔の顔はいっそう険しく、湧き出る快楽を堪えていた。

●月●日

先ずは反省せねばなるまい。
焔の調教が捗りすぎて日誌の方が疎かになっていた。
調教開始から今日で七日目。
随分と間が空いてしまった。
調教はかなり進んでいる。
二日目の終わりから焔は堪えきれず喘ぎ出した。
三日目の半ば。焔は乳首を摘ままれ、絶頂した。
四日目は筆責めに加え、塗布する薬液を使用することにした。
五日目に焔は十二回ほど絶頂し、足元には滴る体液で水溜まりが出来ていた。
六日目には更に回数が増え、数えるのも億劫になるほど絶頂していた。
そうして七日目。
本日は風呂で焔を弄ぶことにした。
奴隷とはいえ身だしなみには気をつけたい。
あまり不衛生だと此方も気持ちが悪いのだ。
精液まみれにして独房に放置など論外である。

入念に、念入りに、体の隅々まで洗ってやらなければならない。
革のベルトで両手足を縛った焔を浴槽へつれていき、マットレスの上へ寝転ばせ、裸の肢体を泡のついた指で撫でていく。
汚れが残らぬよう、指の腹で乳首を擦ってやると、奥歯を噛み締めたうめき声が聞こえてきた。
手足を暴れさせ、身に這う快楽から逃げようと、芋虫のように床を這おうとしていた焔だったが、湯で流しながら乳房を揉んでやると、背筋を震わせ動かなくなる。
絶頂の余韻に焔の瞳は蕩け、しかしてまだ私に対抗する意思の炎は燃えていた。
それでこそ。調教のしがいがあるというものだ。
私は汚れてしまった焔の股を指で洗う。
陰部に触れたのはこれが初めてだった。
濡れそぼった膣にはすんなりと指が入る。
膣壁をへその方へ擦ってやると、未知の刺激に耐えきれず、焔はすぐに絶頂した。
ふざけるな。もうやめろ。
息も絶え絶えに焔は私を睨み付ける。
しかし止めるわけにはいかない。
身体を綺麗にするために風呂に入っているのだ。
絶頂する度、噴き出す愛液で焔の肢体は濡れている。
少なくても、もう一度は洗う必要がある。
私は再び焔の女陰に指を入れた。
焔は身を捩らせ、上ってくる絶頂を必死に堪えていた。

●月●日

調教八日目。
流石に調子にのり過ぎた。
昨晩幾度と無く絶頂させられた焔は、独房のベッドの上でぐったりとしていた。

普通の人間よりは体力がある忍なれど、あれは堪えたらしい。
いい女を前にしてはしゃいでしまった。
なので本日は軽めの愛撫にすることにした。
使い込まれていないであろう、新品の尻の穴をほぐし、使えるようにする。その準備だ。
特注の台に焔をうつ伏せに寝かせ、台の足に手足を拘束。
突き出ていた尻の穴に薬液を注入し、準備を済ませる。
冷たい液体が腹に収まっていくのを、焔は奥歯を噛み締め堪えていた。

●月●日

調教開始九日目。
焔のアナルを本格的に開発する。
昨日と同じ台に焔を縛り、穴の入り口を慣らしていく。
指一本咥え込むのがやっとな穴に、潤滑油を塗り込み、少しずつ指を押し込む。
人差し指が根元まで入るまでに、焔は何度か絶頂したようだった。
声を押し殺す頻度も少なくなってきている。
無駄な抵抗だと悟ったのか、身を震わす快楽に逆らえなくなったのか、あるいはその両方か。
荒い呼吸を繰り返し、指を入れる俺の顔を焔はじっと睨んでいた。

●月●日

調教十日目。
焔の開発は順調だ。
潤滑油を塗りたくった指が腸壁を擦る度、焔は息を漏らし身をよじる。
台の上で四つん這いになり、何度もストロークが繰り返されている内に、焔の手足から力が抜けていく。

二本目の指を入れたとき、焔は大きく絶頂した。
女陰から潮を噴き出し、開いた口からは獣のような絶叫が漏れる。
念入りにほぐしていたアナルもどんどん柔らかく、より大きなモノを受け入れられるようになってきていた。

●月●日

調教開始から十一日目。
焔の尻の穴は早くも三本、指が入るようになってきた。
今日からは指以外の玩具でも開発を続けていこうと思う。
本日試したのは私が懇意にしている玩具職人の新作。
アナルビーズと呼ばれる淫具である。
柔らかい球体が何個も繋がった珍妙な物体である。
いつものように四つん這いにさせ、潤滑油を馴染ませた球体を先端から焔のアナルへ入れていく。
連日の開発の成果もあってか、全部で十繋がっていた球体は、すんなりと焔の腹に収まった。
体内からくる圧迫感と、腸壁を連続して押し広げられた快感を焔は必死に堪えている。
私は収まっていた淫具を一気に引き抜いた。
抵抗感はありながら、すんなりと抜けてしまった淫具と広がったままの焔のアナル。
声にならない声をあげ、絶頂している焔のアナルに私は再び淫具を挿入する。
先ほどまで絶頂が残った体に更に快楽を押し付けられ、焔は泣き叫びながら失禁していた。
もうやめてくれ。
先日聞いたその言葉からは、余裕の色は消えていた。

●月●日

調教開始十二日目。
昨日に引き続き、淫具を用いて開発を行う。
台に縛り付ける際、焔は一層暴れた。
昨晩の快楽に恐怖を覚えた。そんな顔をしていた。
もう少しなのだろう。彼女を支える精神の柱は折れかかっている。
気が強く、罵詈雑言が飛び出していたその口からは、嘆願の言葉しか出てこない。
そろそろ仕上げに取りかかる段階に入ってきたようだ。

●月●日

調教開始十三日目。
久しぶりに手枷を使って焔を吊り上げる。
頭の上で拘束されている焔の指に力はない。
ただ幾分か冷静さは取り戻せたようで、瞳に光が戻ってきていた。
私は勃起した己の陰茎を引き締まった尻の肉へ擦り付けた。
起立した肉棒が尻に食い込み、焔の声が震える。
昨日まで自分を弄んでいた淫具より強大な肉の棒の感触が、熱力が、その顔に焦りを浮ばせている。
冗談だよな。こんなの、入る訳がない。
焔の体が震え、拘束する鎖が鳴った。
勿論、冗談ではない。
これを気持ちよくしてもらうために、今まで時間を費やしてきたのだ。
焔の体を抱き締めながら、私は肉棒をアナルに突き刺した。
焔が絶叫する。
その口をこちらの唇でふさいだ。
暴れる舌に舌を絡めていると、焔の腸壁がじわじわ広がり、しかして私の肉棒をきつく締め上げる。
私の舌を噛み千切る。
そんな余裕も無かったのだろう。

女を陵辱していく抽挿を、焔はただされるがままで受け止めていた。
一度突く度、焔の陰部が潮を噴く。
徐々に加速していく私の腰使いが、逃げ場所の無い快楽を叩きつける。
暴力的に荒々しく、尻の穴を犯されているというのに、焔の身体は絶頂し、私という雄とその子種を悦んでいた。

●月●日

調教開始十四日目。
昨日一日中、尻の穴を犯されていた焔は、私の顔を見て恐怖の感情を隠さなくなった。
みっともなく、戦士としての矜持も捨て、もう犯さないでくれと懇願する。
恥ずかしながらその姿を見て私は勃起していた。
強い女が折れた瞬間というのは、何とも言えない興奮に襲われるものだ。
まるで生娘のように、私から逃げ出す焔を背後から捕まえ、その股の間に肉棒を滑り込ませる。
言葉や態度とは裏腹に、焔の淫核は勃起し愛液で太腿は濡れていた。
亀頭が淫核を刺激する度、焔は息をこぼす。
時間をかけた調教は、焔の身体を意思と関係なく男を受け入れるものに変えていた。
恐怖で震える身体にはもう私を振りほどく力も残っていない。
ずぶり、と閉じられいた女陰に肉棒が沈んでいく。
弱々しい制止の声が、私の劣情を止められるはずもなく、いきり立った陰茎な焔の陰部を貫いた。
焔の瞳が大粒の涙を流していた。
どうやら処女だったらしい。

初めて男を受け入れた膣内が、きつく肉棒を締め付ける。
それが堪らなく、気持ちいい。
気づけば私は一心不乱に、腰を使って焔の女陰を責め立てていた。
激しい抽挿はすぐに終わりを迎え、私はあっという間に焔の膣内(ナカ)に精を吐き出してしまった。
長い射精の快楽が脳髄を駆け巡る。
胎内に子種を注がれた焔は、暗い瞳のまま絶頂に震えていた。

●月●日

調教開始●●日目。
十四日目からの記録をつけ忘れてしまっていた。
長い間が空いている。
久しぶりに手帳を開いた。
結局日誌をつける習慣は身に付かなかったようだ。
次に書き込むのはいつになるやら。
まあでも最後に近況だけでも纏めておこう。
くノ一であった焔は、今やすっかり私の性奴隷となっていた。
私が初めてを奪ってから幾度と無く犯し、精液を注いだ女陰は私の肉棒の形を覚え、いつでも劣情を受け止める穴となっていた。
こうして筆を走らせているこの時も、焔は乳房と口を使って私の肉棒に奉仕している。
教え込んだ舌使いは、今や私をすぐに昇天させてしまうほど熟練し、互いの体液で汚れた竿を躊躇無く咥え込む。
従順になった焔は噴き出した精液を身体中で受け止め、余すところなく口に含んで嚥下する。そんなことさえ厭わない。
快楽を教え込まれ、ただ一匹の雌となった焔は貪欲に私の精を貪る獣である。
ありし日の彼女の面影はもうどこにもない。
焔という名前は、私の陰茎をしゃぶり、乳房に垂れた精液を恍惚と舐める女の名前に変わったのだ。

くノ一調教日記・雅緋

●月●日

日記をつけることにした。
白紙の手帳を見つけたから。
とかそんな理由だ。
あまり長続きはしそうにないが頑張っていこうと思う。

●月●日

電飾の光が夜の闇を照らすようになった現代にも忍者はまだ存在している。
雅緋（みやび）という女もその一人だ。
強大な力を身に宿し、闇の世界において一目も二目も置かれる存在。
そんな女を無力化し、手中に納めることが出来たのは非常に幸運であった。
非力な私でもあの魅力的な身体を好き放題にできる。
日記に記す内容は決まった。

●月●日

我が家の地下室に女が運び込まれた。
件の雅緋というくノ一である。
衣服は既に剥ぎ取られており、手足を拘束され、特注の椅子に大股開きで座らされている。
さっぱりとした短髪が中性的な雰囲気を醸し出しているが、その乳房は豊満であった。

早速揉んでみた。
柔らかい。しかしその感触を堪能するには、雅緋の殺意の籠った視線が邪魔だった。
なので私に従順になるよう、調教することに決めた。
その様子を書き留めれば日記も埋められるので一石二鳥である。

●月●日

調教開始一日目。
雅緋の大きな乳房を弄ぶ。
昨日の失敗を生かし、目隠しと猿ぐつわをしてから胸を揉む。
歴戦の猛者と噂される女だが、その白い肌に傷はひとつも見られない。
美しい柔肌に指が沈み、整った形の乳房を歪める。
そうして暫く。
独特の弾力と柔らかさを堪能している内に、雅緋の乳首が固くなっていた。
外気に触れていたからか、愛撫に快感を覚え始めていたからか。
どちらにせよ弄り易くなったのは間違いない。
指で弧を描くように乳頭を撫で、優しく爪で弾いたり、少し力をいれ摘まんだりする。
猿ぐつわの奥から聞こえる声は、些か艶やかになってきていた。

●月●日

調教開始二日目。
本日も雅緋の乳房を責めることにした。
昨日と同じように指で乳首をこね回す。
ひとしきり愛撫を堪能した後は、その豊満な乳房にしゃぶりついてみる。
手とは違う感触、温度を乳首に感じた雅緋はくぐもった声を漏らし

た。
舌が乳頭を突つき、唾液で濡れた桃色の粒を軽く噛むと、漏れる声は更に大きくなる。
口を窄め、乳首を吸ってやると椅子に座らせていた雅緋の身体がびくんと小さく跳ねた。
雅緋はこういうのに弱いらしい。
明日からの調教も楽しみである。

●月●日

調教開始三日目。
昨日に続き乳房を赤子のように舐め回す。
指で行う愛撫よりも雅緋は敏感に反応する。
それならば、と乳房以外の場所にも舌を這わせてみることにした。
浮き上がる細い鎖骨を舌でなぞると、雅緋は吐息を漏らした。
首筋を嘗めてやると背筋を震わせた。
紅潮した頬を舌で撫でてやると、くぐもった声が殺してやるぞと私の耳元をくすぐった。
まだまだ反抗的な言葉が出てくるようであったが、無理矢理開かせてある股ぐらからは透明な液が溢れていた。

●月●日

調教開始四日目。
本日も昨日から引き続き舌を使った愛撫で雅緋を責めていく。
乳房も、鎖骨も、首筋も。
昨日舐めた時より反応がいい。
特に乳首はお気に召したようで、舌でねぶり軽く歯を立て虐めてやると、びくびくと身体を震わせていた。
その絶頂に合わせて股間から染み出していた体液が、雅緋の下半身をぐっしょり濡らしていた。

●月●日

調教開始五日目。
段々と雅緋の身体は絶頂を覚えてきていたようだ。
責め方自体は昨日と変わらないものであったが、雅緋の反応はより一層大きくなっていた。
猿ぐつわをしている口から漏れ出す声は、最早叫びとなっている。
開発は順調に進んでいるようだ。
本日は次の段階に進む前に、試しに彼女の目隠しと猿ぐつわを外してみることにした。
既に三度ほど乳房への愛撫で絶頂していた雅緋は、身体に残るオーガズムの余韻を噛み殺すように、口をつぐみ大きな瞳で私を睨み付けた。
その視線に負けじと私も雅緋への愛撫を続ける。
乳首に加え、新たに雅緋の秘所へと指を伸ばす。
既に濡れていた女陰は、粘質な水音を立てながら私の指を受け入れる。
殺してやる。と雅緋が叫んだ▪。
私はわざと水音を響かせ、雅緋の陰部を弄る。
勃起した淫核を指の腹で押してやると、雅緋の憎悪の声は悲鳴にも似たよがり声に変わった。

●月●日

調教開始六日目。
愛撫を乳房から雅緋の秘所へと移すことにした。
道具も用いる事にする。
用意したのは所謂ディルドと呼ばれる玩具と、電池式の小さいローターだ。
長いバイブを雅緋の女陰に押し込み、勃起した乳首と淫核にロー

ターを固定する。
独特な固さのシリコンの挿入とバイブレーター強い振動は、雅緋にとって初体験だったらしく、彼女を絶頂まであっという間に導いた。
殺してやる。と口からは溢れたその声は、昨日よりもか細く小さい。
ディルドの抽挿と絶えず変化するローターの振動は、雅緋の殺意を快楽で塗りつぶしていく。
何時間にも及んだ愛撫の末に、とうとう雅緋は憎まれ口を叩かなくなった。

●月●日

調教開始七日目。
昨晩は長丁場であった。
つい熱が入ってしまった調教は、朝方空が白んでくるまで続いた。
長時間に及ぶ愛撫に耐えきれなくなった雅緋は、私に対する敵意を維持できず、ディルドの抽挿に喘ぎ何度も絶頂を繰り返していた。
一眠りした後、私は地下室へ赴いた。
椅子に縛り付けられ、一晩中ローターの電源を入れられたまま、絶えず刺激を与えられ続けていた雅緋は、息も絶え絶えといった表情で、それでも私の顔を睨み付けた。
まだ折れないとは、嬉しい誤算だ。
彼女の芯の強さを垣間見て、つい気持ちが昂ってしまった。
彼女を犯したくなってしまったのだ。
予定していた開発を取り止め、私は雅緋を鎖で縛り吊り上げる。
強引に開かせた股の間から、溢れんばかりに濡れていた雅緋の秘所へ、私は肉棒を突き立てていた。
雅緋が絶叫する。
バイブの挿入では聞いたことが無かった声だ。
愛液が溢れる蜜壷は、私の陰茎をぎちぎちと締め上げる。
これだけ濡れていなければ、抽挿は困難だっただろう。

雅緋は処女であったようだ。
ちくしょう、ちくしょう。と目の端に涙を浮かべ、鎖と手枷から逃げ出そうと雅緋はもがいた。
私はその肢体を押さえつけた。
柔らかな肉体を堪能するように、肌に指を沈め腰を打ち付ける。
嫌だ、嫌だと泣きながら雅緋は絶頂した。
嫌悪や憎悪、怒りが支配していた雅緋の頭の中が、男根が与える快楽に侵食されている。
その様をありありと見せつけられ、私はあえなく雅緋の膣の一番奥へ精液を吐き出した。
長い射精だった。
びくびくと震える雅緋の身体を抱き締めながら、一滴残さず子種を注ぐ。
どれほど時間がたったのか。
記憶も意識も曖昧になりながら陰茎を引き抜くと、雅緋の割れ目から白く濁った体液がぽたぽた床に落ちる。
雅緋は放心していた。
端正な顔が涙と唾液でぐちゃぐちゃになっている。
その口から言葉は出てこない。
ただ快楽の余韻に背筋を震わせていた。

●月●日

調教開始八日目。
と書き出したい所だが、手帳を開いているのは九日目である。
七日目に行ったら雅緋との初めての性交。
それがあまり気持ち良すぎて、気づけば一晩中雅緋の女陰を味わっていた。
日付が変わり、日が高く登った頃。
流石に打ち止めになったのを見計らって雅緋を風呂に連れていき、連日の調教の汚れを落とす。

と、そこでまた。いきり立った肉棒を雅緋の身体を使って治める。精を吐き出す。
まるで盛りのついた獣である。
性欲に限りはなかったが、体力は流石に持たなかった。
なので雅緋を地下室に戻した後、一日ほど休息の時間を作ったのだ。
あれ以上続けていたら腹上死は免れない。さしもの雅緋もあれ以上昇天させられていたら、本当にあの世に逝ってしまったかもしれない。
一連の行為を深く反省する。
ちなみに体力はまだ回復しきっていない。もう一日休みにしよう。

●月●日

調教開始十日目。
二日の休日を挟み、今日から調教再開である。
二日ぶりの雅緋の顔はやつれていたが、少し瞳に力が戻っていた。
私の顔を見るなり罵声を浴びせるくらいには回復していた。
では遠慮なく。私は調教を始めた。
私を罵倒はしても雅緋の身体は快楽を求め簡単に喘ぐようになっていた。
手淫と舌で秘所を責めると呆気なく絶頂した。
やはり舌で舐められるのが好きらしい。
淫核を舌でつつくと、雅緋は何度も膝を震わせ割れ目から汁を吐き出した。
入念な準備によって濡れそぼった女陰は、容易く私の男根を咥え込んだ。
初めて味わった時よりも、いくらか締まりはなくなったが、それが逆に心地よい。
柔らかくほぐれた膣をゆっくりと犯してやる。
雅緋は顔を紅潮させ、嬌声を私に聞かせぬよう、必死に唇を噛んで

いた。

●月●日

調教開始十一日目。
前戯にかける時間は日に日に少なくなっている。
私の指が軽く触れるだけで、雅緋の陰部は湿り気を帯びるようになっていた。
雅緋は覚えたのだろう。
男の指に撫でられる快感を、肌に舌が這う快楽を、男根が女陰を抉る悦びを。
雅緋の屈強な矜持が、意思を強く持たせているが、その支柱にヒビが入り崩れ始めている。
鎖に吊るされた雅緋を背後から犯していると、固くつぐんだ口の端からじわじわと嬌声が溢れてきていた。

●月●日

調教開始十二日目。
本日は体位を変えてみる。
今までは後背位で犯すことが多かったが、前から責めてみることにした。
最初より反抗の意思は弱くなってきたが、まだ雅緋に屈服した様子はない。
台の上に寝かせ、手足を厳重に縛る。
挿入の邪魔にならないよう、股だけは開かせる。
身動きひとつ取れず、ただ男に突かれるだけの姿勢だ。
未だ反抗的な態度と、その体勢のギャップというのは、なかなかどうして堪らない。
前戯も早々に済ませた私は、はち切れんばかりに怒張した陰茎を、雅緋の秘所にねじ込んだ。

雅緋は大きく息を吐いた。
ぎしぎしと台が揺れ、腰を突きいれる度豊満な乳房が暴れまわる。
一度目の射精は雅緋の腹の上に出した。
今まで注ぎこまれていたモノがなんなのか、それを教え込むよう吐精する。
精液のすえた匂いを嗅いで雅緋が私を口汚く罵った。
その声は弱々しかった。
二度目は胸部にかけてやった。
更に顔に近い位置で、私の精液と雅緋の愛液が混ざり合って溜まっていた。
雅緋は声を上げず、その体液をただじっと見つめていた。

●月●日

調教開始十三日目。
そろそろ仕上げに取りかかる。
久しぶりにローターやバイブを使うことにした。
体位は昨日と同じまま、開かせた股にディルドを押し込み、乳首と淫核に固定したローターのスイッチをいれる。
秘所からはすぐに愛液が溢れてきた。
が、雅緋の様子は大人しかった。
初めて使った時のように暴れることもなく、必死の表情で快楽を堪えてはいない。
ただ憮然と黙っているだけだ。
愛撫を続けても、雅緋が絶頂した様子はない。
私は舌打ちをする。
わざと苛立った様子を見せる。
雅緋は耐えてやったぞ、と勝ち誇るように笑みを浮かべる。
愛撫を止め、私は逃げるように地下室から出た。
この先が楽しみで仕方ない。その表情を雅緋に悟らせないように。

●月●日

調教開始十四日目。
今日も玩具で調教する。
しかし依然として、雅緋を絶頂させることはできなかった。
雅緋の表情に余裕が現れ初める。
私は調教に耐え、遂には弄ばれることがなくなったのだ。
そう思っているのだろう。
仕上げは順調に進んでいるようだ。

●月●日

調教開始十五日目。
手を変え品を変え、雅緋を玩具で責め立てる。
しかし雅緋の増長が増すばかりで、彼女に絶頂は訪れない。
部屋を出る際、雅緋は皮肉混じりの軽口を叩いてきた。
すっかりと元の調子に戻ったようである。
流石に忍は回復が早い。
そろそろ頃合いかもしれない。

●月●日

調教開始十六日目。
さて、本日は三日ぶりに雅緋を犯してやることにしよう。
見慣れた台の上に寝かせて固定した雅緋は、嘲るような笑みで私を罵倒してきた。
悔しそうに呻きながら私は前戯を開始する。
指や舌を用いた愛撫でも雅緋は絶頂しなかった。
愛液で女陰が濡れはすれど、雅緋の笑みは余裕を携えたままだ。
その顔が堪らない。
もう少し長い間演技をしていたかったが、私も限界だった。

三日も精液を吐き出していない肉棒は、雅緋の匂いでぱんぱんに膨らんでいた。
それを見せつけるように、仰向けに寝せた雅緋の腹に擦り付ける。
雅緋の顔つきが少し変わった。
油断し緩めていた口から、僅かにだが艶やかな声が漏れた。
それがどういう意味を持つ反応なのか。
雅緋はまだ理解していない様子だった。
だから教えてやった。
雅緋の女陰の奥深くまで、男根を一気に突っ込んだ。
瞬間、雅緋の身体が跳ねた。
拘束がなければそのまま後ろに仰け反っていただろう。
声にならない声をあげ、雅緋は潮を噴き散らす。
誰がどう見たって雅緋は絶頂していた。
一体何が起こっているのだ。
目を白黒させている雅緋の耳元で囁いた。
お前はコレをずっと求めていたんだと。
膣に押し込められた陰茎をなぞるように、雅緋の腹を指で押す。
そんなのは、嘘だと。
雅緋の震える唇が言葉を作った。
私はそれに抽挿で答える。

膣壁を亀頭が擦る度、雅緋は絶頂する。
道具を使った愛撫に見せていた余裕はどこにもない。
されるがまま喘ぎ、絶頂し、三日ぶりの射精を雅緋は降りてきた子宮で受け止めた。

●月●日

調教開始十七日目。
忘れぬ前に種明かしを書いておく。
一昨日までの三日間。

道具を用いた調教は、端的に言えば手加減していた。
これまでの調教で得ていた雅緋の弱点をあまり責めず、わざと刺激を弱めていた。
後に行う性行為を強調するためだ。
油断と余裕が生まれ始めていた雅緋を本気で犯す。
そこで今までのような快楽が一気に押し寄せてくる▪。
自力で耐えていたと信じていた雅緋は、膣を抉る肉棒の快感に恐怖すら覚えていただろう。
私の言葉と男に犯される快楽は、雅緋の頭によく染み込んだ筈だ。
本日は更に深く、雅緋に肉棒と快感を教えてやった。
昨日までと同じ、台の上に寝かされていた雅緋は、私と勃起した陰茎を見るなり小さく悲鳴を上げた。
それを近づけるな。
雅緋の焦りを無視して、私は女陰に亀頭を押し付ける。
それだけのことで、雅緋の蜜壷からは液があふれでてきた。
滑りをよくするよう、秘所から出てくる愛液を肉竿に擦り付ける。
それだけの刺激で雅緋は絶頂しそうになっていた。
嘘だ、嘘だ。
雅緋の震えた声が聞こえてくる。
私はゆっくりと肉棒を女陰に沈めてやった。
亀頭が奥まで届くまでに、雅緋は何度も絶頂した。
違う、違う。
雅緋は我が身を襲う快楽を必死に否定する。
男でしか得られない快楽と、それを享受し更に求める女の自分を。
戦士として過ごしていた雅緋は受け入れられないようだった。
私は涙を浮かべるその顔を撫でてやる。
否定することはない。
女として当たり前の快楽なのだから。
受け入れるんだ。そうすればもっと気持ちよくなれる。
雅緋は幼子のように泣く。
股ぐらにしっかりと男を招き入れ、快楽を貪っているが、その表情

は少女のそれだ。
ゆるりと膣内を撫でるような抽挿に、雅緋の泣き声が、雄を誘う雌の鳴き声に変わってゆく。
無理矢理口を閉じ、男に媚びる声を聞かせぬよう我慢することも忘れ、雅緋はただ私を受け入れ続ける。
長い時間をかけ、たっぷりと肉棒の硬さを思い出させてやり、最後に精を吐き出すと憚ることなく雅緋はよがり声を上げた。

●月●日

調教開始●●日目。
暫く書き込んでいなかった日記を見つけ、悩んだ挙げ句、近況を綴り〆ることにした。
あれから雅緋は自らの性を自覚し、積極的に私の性を求めるようになった。
聞けば今まであまり女扱いされていなかったらしい。
くノ一を養成する学園では、中性的な見た目からまるで王子様のように扱われていたのだとか。
女でしか得られない快楽は、そんな雅緋の鋼の心をどろどろに溶かし尽くした。
殺意のこもった視線も今となっては懐かしい。
何度も犯してやる内に、雅緋は男を迎え入れることになんの躊躇もなくなっていた。
髪や頬を撫でてやるだけで股を濡らし、乳房を揉めば喘ぎ出し、勃起した肉棒と出された精液の味を恍惚の表情で堪能する。
その姿、雅緋の過去を知る人が見れば、己の目を疑うだろう。
私の子を孕むため、子種をねだる雅緋など信じたくはない筈だ。
雅緋という女は変わってしまった。
その名前は最早、一匹の雌を呼ぶためだけの記号に成り下がった。

くノ一調教日記・雪泉

●月●日

白紙の手帳に書き込むものといえば日記である。
という訳で日記をつけることにした。
なるべく長続きするよう、頑張って見たいと思う。

●月●日

現代社会において、忍者は二種類に分けられる。
国家に直接雇われている善忍。
金さえ払えば誰にでも従う悪忍。
今回捕らえたくノ一は、善忍である。
雪泉（ゆみ）という名前で呼ばれる少女だった。
はだけた着物から見える肌は雪のように白く、儚げな美貌は見るものを虜にする。
虜囚の身に堕ちても、毅然とした態度を崩さない強き心を持ったそんな乙女の肉体を、思う存分楽しめるのだ。
私は高揚していた。
昂り過ぎて字が汚くなってしまった。
そこは反省しよう。

●月●日

本日よりくノ一、雪泉を調教する様子を記していこうと思う。
我が家の地下室に入れられ、身動きをとれぬよう鎖で縛られた、彼女の姿はそれを見ただけで男心をくすぐった。
細い首に巻かれた首輪には、彼女が持つ異能の力を封じる効果があ

る。
手も足も、戦う力も奪われた雪泉は、部屋に入ってきた私を静かに睨んでいた。
その反抗的な目付きが私の興奮を駆り立てる。
鎖で吊られた雪泉に手を伸ばし、広げた指で豊満な乳房を揉んでやる。
雪泉の身体はしっとりと柔らかく、ほんのりと冷たかった。
乳房に私の体温を感じて雪泉は顔をしかめる。
衣服は剥ぎ取られ、身体を動かす自由も無いが、心だけはまだ折れていない。
そんな意志が籠められた瞳を、一体どうやって曇らせてやろうか。
お楽しみは始まったばかりである。

●月●日

調教開始二日目。
雪泉の乳房は大変魅力的である。
いくら揉んでも飽きがこない。
時間を忘れただひたすらその感触を楽しんでいると、今まで口を固くつぐんでいた雪泉が小さく息を漏らした。
私は顔を上げると、雪泉はふいと視線を背ける。
私は乳首を中心的に責めてみた。
乳頭を指で擦る。乳輪をなぞるように爪を立てる。
強くつねってやると、その視線に籠る殺意が深くなった。
あれこれ試してみたが、一番反応が良かったのは乳首を乳房ごと指でやさしく揉んでやることだった。
ゆさゆさとわざと揺らしながら揉むと、雪泉の口から小さく声が漏れた。
発見である。一歩前進である。

●月●日

調教開始三日目。
本日も乳房を弄ぶ。
昨日に引き続き入念に揉んだり、擦ったり後、私は潤滑剤を取り出した。
所謂ローションだ。
ぬるぬるとした液体を雪泉は僅かに不安げな瞳で見ていた。
一体コレがなんなのか。知識が無かったのだろう。
その身体で知って貰うため、私はローションを馴染ませた指を雪泉の乳房へ伸ばした。
粘質な水音が地下室に響いた。
雪泉は必死に滑りがよくなった私の愛撫を堪えていた。
先ほど雪泉の乳房へ行った行程を繰り返す。
乳輪をなぞり、勃起した乳頭を指で挟んでしごいてやると、雪泉は身をよじりその快楽から逃れようとした。
彼女を縛る鎖が鳴る度、整った顔立ちから余裕がなくなっていく。
こんなこと、もうお止めなさい。
声が上擦らないよう、必死に堪えながら雪泉は言った。
私はただ、雪泉の乳房を弄り続けてた。
雪泉の呼吸はだんだんと、熱を帯び荒々しくなっていた。

●月●日

調教開始四日目。
昨晩に引き続き、雪泉の乳房を開発する。
昨晩と違うのは最初からローションを用いたということだ。
あのてかりを見た瞬間、雪泉が息を呑んだのがわかった。
どうやらお気に召してくれたらしい。
私は雪泉の乳房を揉み続けた。
与えられ続ける刺激に、雪泉はふるふると震える。
目を閉じ口を閉じ、ただじっと耐えている。

しかし身体はしっかりと反応していた。
雪泉の引き締まった太ももの先から、一筋の線を引くように、透明な液体が垂れていた。
雪泉はそれを悟られぬよう、限られた足の自由を駆使して太ももを閉じていた。

●月●日

調教開始五日目。
本日も雪泉への愛撫は乳房から始まった。
雪泉の乳首は私の指に触れられると、すぐに勃起するようになっていた。
乳頭を擦る愛撫の時間は昨日より長くなる。
雪泉はまた、足を閉じて私の視線から確かな証拠を隠していた。
私は雪泉の下半身へと手を伸ばした。
嫌がる雪泉の両足を無理矢理開き、閉じられぬよう新たに器具を用いて固定する。
大股開きになり、隠すものがなくなった雪泉の秘所からぽたぽたと愛液が零れ落ちる。
雪泉は羞恥に顔を赤く染め、私の顔を見ないように視線を反らした。
隠すことはない。
言いながら私は雪泉の太ももを撫でる。
膝から徐々に上に指を滑らせ、股の付け根を擦ってやる。
雪泉の口ははっきりと悦楽の声を漏らした。
女陰の割れ目を指でなぞると背筋を大きく震わせる。
しとどに濡れた性器を見れば、彼女が感じているのは明らかだった。
私は愛液を指で掬い、見せつけるように雪泉の鼻先へ持っていった。
雪泉の顔は怒りと羞恥と快楽で、真っ赤に染まっていた。

●月●日

調教開始六日目。
昨日に引き続き、乳房と下半身を責めることにした。
ローションを付け、嫌がる彼女の全身を撫でる。
乳房を触るだけで乳首は勃起するようになっていた。
太ももをゆっくりと揉み、尻を撫でてやると雪泉の膝が震えだした。
開かせた股ぐらからは、絶えず愛の汁が落ちていく。
雪泉はうつむき声を上げぬようひたすら耐えていた。
なんともいじらしい姿だ。
私の中の嗜虐心は破裂せんほどに膨らんでいた。
私は雪泉の秘所へ指を伸ばした。
入り口を軽く触り、ゆっくりと二本の指を中へと閉じられた穴の中へと沈めていく。
震える声で雪泉は私を制止する。
私は止まらず、指を奥へ奥へと送った。
熱い膣内が二本の指を締め付ける。
おそらく処女なのであろう、キツい女陰の中で私の指が動き出すと、雪泉はたまらず声を上げた。
最早愛液は止めどなく滴り落ちている。
乳首を責めていたもう片方の指を、勃起した淫核へと伸ばすと、雪泉は今までで一番暴れだした。
指の腹で淫核を押し潰し、膣内を押し広げるよう指の抽挿を繰り返す。
雪泉は絶頂した。
オーガズムを得たその身体はがくがくと揺れていた。
私は更に雪泉に快楽を与え続ける。
止めてください。お願いします。
雪泉は遂に懇願を始めた。

女としての絶頂を知った少女は、その刺激的過ぎる快楽に恐怖を覚えたようだった。

●月●日

調教開始七日目。

ここ何日も雪泉の痴態を見ていたせいで、私の性欲は限界に達していた。

そろそろ雪泉に男を教えてやろうと画策していたのでちょうどいい。

本日は彼女を使って情欲を解消してやることにした。

地下室に縛られている雪泉にいつも通りに愛撫をし、しっかりと秘所が濡れているのを確認した私は、彼女に膨れ上がった一物を見せつけた。

起立する肉棒を見て、すぐに雪泉は目を反らした。

さっさとおやりなさい。

そう言って目を閉じた。

これから何をされるのか、そのくらいは理解しているようだった。

私は雪泉の閉じた太ももの間に潤滑剤を塗った陰茎を押し込む。

引き締まった太ももの厚が、なんとも言えない刺激を私の竿に与えてくる。

挿入してしまおうかと思っていたがすぐにその考えは改めた。

女陰には挿(い)れず、素股を味わってみることにした。

秘所に肉竿を突き立てぬよう注意を払いつつ、私は腰を使い始めた。

後ろから股ぐらを弄ばれ、突く度に雪泉の大きな尻が潰れる。

柔らかく張りのある弾力は、乳房のそれとも違った快感である。

ぐちゅぐちゅと音を立て、雪泉の愛液が私の先走り汁と潤滑剤と混ざり合い、白い泡となっていた。

私は雪泉の淫核に肉棒の先端を擦り会わせた。

一度目のストロークが雪泉の白い背中を震わせた。

二度目のストロークで雪泉は堪えきれず嬌声をあげた。
三度目のストロークで私は射精し、雪泉は身体を震わせた。
大量の精液が床に広がっていた雪泉の愛液の上に落ちる。
三擦り半とは情けない限りだ。
しかしそれほど雪泉の肉体は甘美であった。
これをまだまだ味わい尽くせると思うと、すぐに陰茎は膨らみ始めていた。
まだ終わりそうにない。
絶頂の余韻と更なる快楽の予感が、雪泉に小さな悲鳴をあげさせた。

●月●日

調教開始八日目。
昨晩は三度ほど雪泉の太ももを堪能した。
最初は静かにしていた雪泉も、徐々に濃くなる性の匂いと、熱い肉棒の温度を感じ段々と声を出すようになっていた。
三度目を致す時には雪泉は幾度も絶頂し、息も絶え絶えであった。
彼女の身体は悦楽の味わいかたを覚えてしまったようである。
一晩しっかり寝て、体力と精力を補った私は今日の調教のため地下室へ向かった。
私の顔を見た雪泉の視線に未だ敵意は籠っていたが、別のなにかも籠り始めているようであった。
すぐに私は雪泉への愛撫を開始した。
昨日の痴態を恥じるように、今日の雪泉は頑なであった。
いつもなら声を漏らし始める愛撫にも耐えていた。
貴方の思い通りにはさせません。
そう彼女の沈黙が語っていた。
私の嗜虐心に火がついた。
興奮が高まった私は、いつも以上に彼女の恥部を責め立てた。
乳首への愛撫は容易に雪泉を絶頂まで導いた。

濡れそぼった秘所をぐちゃぐちゃにかき回すと、雪泉の震えは止まらなくなった。
そろそろ本番といこう。
絶頂の余韻から抜けきらぬ雪泉。
その力の入らない腰を押さえて、私は肉棒を秘所に挿入した。
雪泉の女陰は私の男根をゆっくりと、味わうように咥え込む。
処女膜を破られた痛みに雪泉は叫んだが、すぐにそれは喘ぎの声へと変わっていく。
膣にその形を教え込むよう、肉棒を奥まで挿入し、動かずたっぷりと馴染ませる。
私が腰を引くと雪泉はよがり声を上げた。
こんなの、知らない。
雪泉の焦りが声から伝わってくる。
挿入された男根から逃げ出そうと雪泉は身体を揺らし始めた。
鎖の拘束はそんな動きでは解けない。
必死の抵抗も、尻を振り男の興奮を誘うだけだ。
それを理解させてやろうと。
私は腰を突き入れる。
雪泉の身体が大きく跳ねた。
絶頂し膣内がきゅうと締まる。
男を逃がさぬように、早く子種を吐き出すように、雪泉の女陰は極上の快楽を与えてくる。
もう止めて、お願いします。
雪泉の声に一切の余裕は無かった。
その声が最高に興奮を増長させる。
私の腰の動きは段々早くなり、泣き叫ぶ雪泉の子宮に向かって射精した。

●月●日

調教開始九日目。

昨日の興奮は一晩たっても覚めなかった。
泰然としていた少女が快楽によがるあの姿が網膜に焼き付いて離れない。
今日は調教を忘れ、一日雪泉の身体を味わうことにしよう。
地下室に赴いた私は、愛撫もせずに雪泉の腹に勃起した一物を押し付けた。
雪泉は男根を見下ろし、もうあれは止めてと哀願する。
その態度が更に陰茎を固くするとは知らずに、雪泉は言葉を繰り返した。
先走りの汁が雪泉の引き締まりつつも、女体の柔らかみを残した腹部に染み込んでいく。
滑りがよくなるとすぐに私はすぐに精を吐き出してしまった。
勢いよく飛び出した精液が雪泉の顔まで届いた。
青臭い体液の匂いに雪泉が悲鳴を上げる。
私の男根はすぐに固くなった。
雪泉の女を更に求めた。
それからは雪泉の全身を使った。
吊り上げた鎖を下ろし、陰茎を乳房に挟んでしごいてやった。
尻の割れ目に肉棒を差し込み、その張りと弾力を堪能する。
素股で執拗に淫核をいじめてやると、雪泉は何度も絶頂した。
女陰に男根を挿入し、私の形を覚えた雪泉の中に精を注ぐ。
内も外も、雪泉の身体の全てを白く濁す。
白濁の汁にまみれた雪泉は、ただ呆然とその匂いと熱さと感触を受け止めていた。

●月●日

調教開始十日目。
流石に昨日は出しすぎたので、今日はほどほどにしようと思う。
地下室に赴いた私は、初心に戻りローションを使った愛撫を行うことにした。

雪泉は私を見るなり殺意の籠った視線を向けてきたが、構わず愛撫を開始する。
するとすぐに雪泉の乳首は固くなり、股からは汁が零れ始めた。
調教の成果が出始めたようである。
私は指を動かし続けた。
まだ抵抗の意思を見せるものの、雪泉の動きは小さくなっていた。
最初の頃と比べるまでもなく、その顔を見れば理解できる。
あれほどの仕打ちを受けて尚、いや受けたからこそ、彼女は快楽を受け入れ、その身体は私の愛撫を悦ぶようになっていた。

●月●日

調教開始十一日目。
仕上げに向かって少し試してみることにした。
昨日と同じく、ローションを使った愛撫を行いながら雪泉の様子を見る。
その顔は与えられた刺激に快楽を感じながらも、どこか腑に落ちない、そんな表情だった。
勿論、表に出していたのはいつものような憮然とした態度であったが。
何度も雪泉の絶頂を見てきた私には、その正体が推察できた。
といってもまだ決定付けられるわけじゃない。
しばらく様子を見ることにしよう。

●月●日

調教開始十二日目。
責め方は変えてみたものの、内容的には昨日と引き続き滑りを良くした愛撫を行うことにした。
雪泉の表情に小さな変化が見られた。
なにかが足りていないのだと、自覚したようだ。

そしてそれを認めたくないのか、必死に表情を押し殺していた。

●月●日

調教開始十三日目。
変わらず同じ調教を行う。
雪泉の変化は一層濃くなっていた。
初めて絶頂したあの時のように刺激を与えても、それでは足りないのだと。
口をつぐんで湧き上がる情欲を否定している様子であった。

●月●日

調教開始十四日目。
雪泉の変化は決定的になっていた。
口には出さないものの、その物欲しげな視線と、それを隠す目蓋の動きは誤魔化せるものではない。
私の推察はどうやら当たっていたようだ。

●月●日

調教開始十五日目。
いよいよ大詰めである。
地下室で愛撫を行い、雪泉の快感を満たしていく。
それだけでは満ちぬことを理解しつつ、雪泉を焦らすように責め続ける。
雪泉の変化は飢餓となって現れた。
口を効かずただ押し黙っているだけだった雪泉が、私に聞いてきたのだ。
また、あれはやらないのですか？
視線に敵意を込め、しかして隠せぬ色情が私の背筋を震わせた。

この瞬間を待っていた。
私は起立した肉棒を雪泉に見せつけた。
鎖を下ろし、顔を低くすると、亀頭が雪泉の鼻先につく。
男根の匂いは嫌でも雪泉の鼻に入るだろう。
今まで散々己を凌辱してきた不快な、男の臭いだ。
先走りに濡れた亀頭を、雪泉の頬にすり付けてやる。
雪泉はそれを嫌がるでもなく、怒りを込めて私を睨むでもなく、ただじっと見つめていた。
求めていたもの、それを否定したい気持ちが彼女の思考を停止させているのだろう。
ならばしっかりと理解させてやらなくてはいけない。
私は雪泉の乳房に肉棒を挟み、快感を貪ってやることにした。
やめなさい。こんなこと。
顔に近づき、離れていく肉棒を見ながら雪泉が言う。
その言葉に強い拒絶はなかった。
なけなしの理性が最後の砦を守っている。ふわふわとした声色だった。
私は止めを指すべく、雪泉の乳房の中に射精した。
どくどくと脈打つ陰茎からは、精の塊が飛び跳ね、雪泉の白い肌を尚白く染める。
こんな、汚らわしい。
言葉と裏腹に雪泉の表情は恍惚と艶やかだった。
顔にかかった精の温度を堪能している。
数日ぶりの精液の匂いは、雪泉の中の女を昂らせているようだった。
どうやら雪泉は、精液の香りや温度を好ましく思うようになっていたようだ。
数日を要した検証の是非は、この表情を見れば解るだろう。
あのどこか物足りなさそうな視線は、ずっとこれを求めていた。
あの時全身に染み込んだ匂いは、洗い流した所ても消えずに、彼女の頭を支配しているようだった。

まさかここまで精を求めるようになるとは。
嬉しい誤算だった。
嬉しくて陰茎が一向に衰えてくれなかった。
雪泉の乳房から肉棒を引き抜いた私は、再び雪泉を吊り上げ、今度はその足の間に滑り込ませた。
竿にこびりついた精液を、刷り込むように雪泉の割れ目へと押し付ける。
愛液が溢れ、精液と混ざり、ぐちゃぐちゃと音を立てていた。
その音に雪泉は酔いしれるような顔をしていた。
もう快感に溺れる表情を隠すこともなくなっていた。
私は男根を雪泉の女陰に突き刺した。
途端に雪泉は絶頂する。
潮を噴き出し、久しぶりの男をすんなりと受け入れた。
雪泉の口からは止めどなく、快楽に喘ぐ声が出てくる。
待ちに待った硬い肉棒が身体の奥を突く度、雪泉の女は歓喜に震えていた。
最後に私はしっかりと教え込むように、果てる直前の男根を女陰から引き抜いて、精液を雪泉の背中で射精した。
吐き出された精液が、雪泉の背骨を伝い落ちる度、彼女は何度も絶頂していた。

●月●日

調教開始●●日目。
こうして筆を執るのは久しぶりだ。
三日坊主は避けられたものの、やはり長続きはしなかった。
最後に雪泉の現在の姿を記して、この記述を終わりにするとする。

私の調教は無事成功し、雪泉は郷土への想いやら仲間のことを忘れ、ただ精を求める女と化した。
性に否定的であった態度は霧散し、今や積極的に私の一物を弄って

くるようになった。
ずるずると下品な音を立て肉竿をすすり、吐精に悦び自ら白濁を身体に塗りたくる。
特に乳房を使った行為を好み、胸の谷間に出された精液を指で掬って綺麗に舐め取る。
人の為に働く善忍は、もうすっかり自らの快楽を優先する雌犬に成り果てていた。

くノ一調教日記・飛鳥

●月●日

なんとなく文字を書きたい気分だった。
なので手帳を開いてみたが、書くことが思い浮かばない。
取り敢えずは今日あったことを記してみることにした。
特筆すべき出来事といえば、やはりくノ一を一人捕らえたことだろう。
五人組の少女達の中で殿を勤めていた飛鳥(あすか)と呼ばれていた黒い髪の少女だ。
他の仲間達には逃げられてしまったが、一人でも美少女を手に入れられた。
その幸運はしっかり噛み締めるべきだろう。
あの娘を好き勝手に凌辱できる。
それが楽しみでならない一日だった。

●月●日

我が家の地下室にくノ一が届いた。
名前は飛鳥。二刀を駆使し戦う忍(しのび)である。
可愛らしい見た目の少女だが、余人の及ばぬ力を修行で得た超人である。
厳重に手足を拘束し、忍術まで封じてやっとその身体を弄ぶことができる。
時間と金はかかったが、それだけの価値はあった。
怯えと困惑、しかして諦めぬと静かに闘志を燃やしている彼女の瞳を見て、そう思った。
では早速、楽しむとしよう。
歩み寄る私に彼女は尋ねてきた。

仲間はどうなったのか？
皆無事なのか？
なんとも健気な話である。
こうして捕らえられ、今にも我が身が凌辱されんとしているというのに、仲間の身を案じるとは。
高潔で、心優しい少女である。
そんな彼女を汚したくて堪らない。
久しぶりの上物に、私の心は昂っていた。

●月●日

調教開始一日目。
本日より飛鳥の調教と、その記録を記していこうと思う。
地下室に赴いた私は縛られていた飛鳥にある提案をした。
君の仲間を捕らえている。
仲間を助けたいか？
なら私の言うことを聞いて貰うよ。
前述したように今回捕らえられたくノ一は飛鳥だけである。
私の言葉には嘘と欲求しかないが、それを確かめる術を飛鳥は持っていない。
飛鳥は僅かに惑ったが、すぐに是の声を返してきた。
仲間の安否は解らぬ上、逃げ出す術も力もない。
最初から否定は出来ない選択肢である。
だがこういうのは、自分で選ばせその選択を受け入れた、というプロセスが肝要である。
他人に無理矢理やらされる行為と、強要されていても自らの意思で行う行為。
この二つは似ているようで別物だ。
この差異が後に飛鳥の心を折る鍵となるだろう。
私は飛鳥の拘束を解いた。
飛鳥はただじっと私の言葉を待っている。

私は衣服を脱ぐよう指示を出した。
飛鳥は顔を鬼灯のように赤くしながら、ゆっくりと脱衣を始める。
カーディガンの下には半袖のシャツ。
女学生のような忍装束を脱いだ飛鳥は、カラフルな横縞の下着だけになる。
赤い頬は更に紅潮していた。
私は更に下着も脱ぐように指示を出した。
流石に飛鳥の躊躇いは大きかったが、仲間の話をちらつかせると、ぎこちない動きで脱ぎ始めた。
ブラジャーが豊満な乳房から外れ、二つの脂肪の塊がぷるんと揺れた。
パンツを脱ぐ為屈んだ時に、明るい桃色の乳首が見える。
じっくりと時間をかけ、遂にパンツが足首を抜け、飛鳥は全裸になった。
柔肌が外気と男の視線に晒され、細い身体が震えている。
乳首や股座を手で隠し、これで満足かと険のある視線を飛鳥は私に向けていた。
その表情だけで絶頂しそうであった。
今すぐにでも押し倒して、この身体を味わいたいが我慢である。
私は飛鳥に着衣を指示し、地下室を出た。

●月●日

調教開始二日目。
昨日は飛鳥に服を脱がせた。
本日は更に責めて見ようと思う。
引き続き、私は飛鳥に脱衣を指示する。
顔を赤らめながらも、その手の動きは昨日よりいくらか早くなっていた。
恥部を手で隠す飛鳥に、今度はその手を外すよう指示する。
躊躇いながらも飛鳥は両手を身体の後ろに持っていった。

隠されていた乳首と、毛の生えてない陰部が露になり、飛鳥の紅潮は一層増した。
目の端には涙が溜まり、羞恥に今にも泣き出しそうになっている。
仲間の為と必死に堪えているのだろう。
私は彼女に近づいた。
至近距離で彼女の裸体を視姦する。
吐いた息が当たるほど近くで見ても、飛鳥の肌は細やかで美しかった。
引き締まった腹部を指で押すと、飛鳥は身動ぎをする。
決して動かないよう付け加える。
飛鳥は目をぎゅっとつむり、指が肌に這うこそばゆさと、よく知らぬ男に触られる嫌悪感を耐えていた。
私の指はどんどん上に昇って、飛鳥の乳房に到達した。
たわわに膨らんだ胸を指で突くと、飛鳥はつぐんだ口から小さく悲鳴を上げた。
乳首を摘んでやると悲鳴は大きくなった。

●月●日

調教開始三日目。
飛鳥への調教は少しずつ進んでいる。
昨日は軽く乳を触った。
今日は愛撫の範囲を広げようと思う。
地下室の飛鳥に服を脱ぐよう指示を出す。
少し手慣れてきた様子で服を脱いだ飛鳥の細い足に手を伸ばし、ゆっくりと上に撫で上げていく。
恐怖と羞恥で震える飛鳥の尻を揉み、その口から悲鳴を出させる。
私は咎めるように、黙っているよう飛鳥に命令する。
唇を噛み締め、指の動きを堪える飛鳥の姿に得も興奮を抱いた私は、後ろから抱きつき彼女の乳房を揉みしだいた。
飛鳥は息を漏らす。

声を出すまいと口を手で押さえていた。
私の命を律儀に守っているようだ。
私の愛撫はどんどん強くなっていった。
ぐりぐりと乳首をこねくり回し、弄ぶよう乳頭を引っ張る。
真っ赤になっていた耳を軽く噛んでやると、飛鳥の身体がびくんと跳ねた。
股を閉じ、膝を震わせ、仄かに感じ始めていた快楽を堪え、ただ私の気が済むのを待っていた。

●月●日

調教開始四日目。
本日も飛鳥に服を脱がさせ、一糸纏わぬ姿になった彼女を弄ぶ。
乳房を重点的に責め、立っていた乳首を指の腹で転がしてやる。
爪を立て乳頭を軽く摘まむと、手で押さえていた口から大きな吐息を漏らした。
時間をかけ飛鳥を愛撫した私は、彼女に新たな命令を下した。
自分の秘所を指で開いて、中を見せてくれ。
私の命に飛鳥は首を振った。
流石にそんな恥ずかしいことできません。
私は言った。
なら仕方ない。君の代わりに仲間の皆にやってもらおう。
無論、捕らわれた仲間などいないのだが。
私の言葉を信じて疑わない飛鳥は顔を青くした。
仲間を盾に取る私に、長い俊巡の時間を挟み、飛鳥は小さく頷いた。
股を開き、震える指で女陰を開く。
先ほどの愛撫の際、快楽を感じていた飛鳥の陰部から、ポタリと床に露が落ちた。
飛鳥の表情は今にも泣き出しそうだった。

●月●日

調教開始五日目。
本日は飛鳥に快楽を教えてやった。
服を脱ぎ、全裸になった飛鳥の股を指で触る。
飛鳥の悲鳴を黙らせて、閉じた割れ目に指を這わせる。
愛液で滑りのよくなった指先が淫核に当たると、飛鳥の悲鳴は喘ぎに変わった。
私の指が飛鳥の女陰の奥へと進んでいく。
指の腹で膣壁を擦ってやると口元にある指の隙間から何度も声が漏れ出てきた。
私は絶え間なく刺激を与え続け、飛鳥はそれを耐え続ける。
どのくらい時間が経っただろうか。
先に音を上げたのは飛鳥だった。
ぐちゅぐちゅと音を立て、指が女陰を行き来する内、飛鳥は背筋を震わせ床に膝をついた。
彼女が絶頂したことは明らかだった。
オーガズムの余韻で力が入らず立てぬ飛鳥の姿は、嫌悪や羞恥が快楽に負けてしまったのを物語っていた。

●月●日

調教開始六日目。
私は飛鳥に命を出した。
私の目の前で自慰行為を行うこと。
指示を出された飛鳥は困惑し、拒否しようと言葉を紡いでいたが、偽りの仲間の現状を伝えると、ぎこちない動きで指を秘所へと伸ばした。
緩慢な飛鳥の指使いに、私は更に命を出す。
絶頂したのを私が見届けるまで終わらないぞ、と。
躊躇いがちに行っていた自慰を急かした。
くちゅくちゅと控え目な音が地下室に響く。

感じ始めてはいるものの、飛鳥の自慰は絶頂までには程遠い。
昨日の愛撫を思い出すよう私は飛鳥に伝えた。
飛鳥は指を女陰の奥へ入れ始めた。
空いた手で淫核を触り艶やかな声を出し始めた。
ぐちゅぐちゅと、音が淫靡に、大きくなっていく。
あれほど緩慢だった指の動きは、昨日教えた私の指使いよりも激しく、貪欲に快楽を貪っていた。
飛鳥は絶頂した。
派手に愛液を撒き散らし、悦楽に喘ぐ声で叫んでいた。
床にへたり込む飛鳥の頭を優しく撫でてやる。
よくできました。と誉めてやる。
焦点のあっていない飛鳥の瞳が私の顔をじっと見ていた。

●月●日

調教開始七日目。
そろそろ次の段階へと移行しよう。
昨日と同じく、私は飛鳥へ自慰行為を命令した。
始めるまだに時間はかかったものの、行為に入ると飛鳥の指は容赦なく、自分の弱点を責め始めた。
もう少しで絶頂するであろう飛鳥に、私は自慰行為を止めるように言う。
昨日とは違う命令に飛鳥は戸惑いを見せていた。
私は新たに命令を出した。
足を広げ壁に手を突くよう、飛鳥に指示を出した。
飛鳥は大人しく言われた通りの姿勢になった。
私は飛鳥の尻に勃起した男根を押し付けた。
これからすることを理解させるように、わざとらしく。
肉棒の熱さを感じた飛鳥は、止めるよう懇願してきた。
だから私は、代わりに仲間を犯してやることを飛鳥に伝えた。
飛鳥は泣き出した。

それだけは止めてください、言うことを聞きますから、と。
目尻に溜まった涙を流して、尻を突き上げてきた。
私は一気に、飛鳥の女陰を貫いた。
初めて男を迎え入れた秘所からは、破瓜の恥が流れ、侵入してきた男根(いぶつ)をぎちぎちと締め上げる。
その狭い膣内を私の形に慣らすよう、少しずつゆっくりと腰を動かした。
元々絶頂間際まで濡れていた飛鳥の女陰は、すぐに私の男根を受け入れ始めた。
飛鳥の悲しみに泣く声は、だんだん悦楽を帯びてくる。
飛鳥の一番奥に亀頭が届くと、その白い背中がぶるりと震える。
そろそろ子種を吐き出すことを、飛鳥に伝える。
飛鳥はそれを小さな声で拒否するが、私の情欲は止まらなかった。
飛鳥のナカに男を植え付ける。
その為に飛び出した精液は大量だった。
長い射精の後、陰茎を引き抜く時、飛鳥の身体が大きく揺れた。
太ももについていた破瓜の血は、秘所から流れ出た精液と愛液で見えなくなっていた。

●月●日

調教開始八日目。
明くる日も私は飛鳥とまぐわった。
飛鳥に自ら股を広げさせ、濡れた女陰に男根を入れる。
地下室に備え付けられていた白いベッドが、その上に寝かせられている飛鳥と共にぎしぎしと揺れ、何度も奥まで突かれた飛鳥はあえなく絶頂した。
昨日の性行為ですっかり快楽を享受することを覚えたようだ。
何度も何度も飛鳥を突き、昇天させる。
ゆっくりと陰茎で膣壁を上に撫でるよう摩ると、飛鳥は私に行為の制止を求めてきた。

その哀願を無視して、今日も飛鳥に種付けを行った。
どくどくと精液を吐き出す陰茎が飛鳥の膣内(なか)で跳ねる度、彼女の身体も悦楽に震える。
昨日まで男を知らなかった少女の顔は、快楽に喜ぶ女の顔へ変わりつつあった。

●月●日

調教開始九日目。
今日は飛鳥に動いて貰うことにした。
備え付けのベッドに仰向けで寝転んだ私は、勃起した男根を飛鳥の女陰で犯すよう指示を出した。
飛鳥の躊躇は最初の頃よりも軽くなってきている。
未だに羞恥は拭えずいるが、あまり躊躇せず、私の腰の上に乗った。
飛鳥はゆっくりと私の肉棒の上へ腰を落とし始めた。
簡単な愛撫でもしっとりと濡れるようになった秘所が、膨らんだ亀頭に触れると飛鳥は艶やかな声を出した。
それを指摘してやると飛鳥は慌てて否定する。
私に言われて仕方なくやっているのだと。
赤い頬を動かし言葉を作る。
その顔に明らかな色情が見られ始めているとは知らずに。
飛鳥は私の肉棒を飲み込んだ。
中程まで飛鳥の秘所に陰茎が入ると、彼女は動きを止めた。
彼女が一番感じる場所に男が入ってくることを躊躇していた。
私は続けるように飛鳥を急かした。
仲間のことをちらつかせると、飛鳥は意を決して腰を更に落とした。
男根が根本まで収まりきるまで、飛鳥は何度も絶頂していた。
私と完全に繋がった時には飛鳥は腰砕けになっていた。
私は容赦なく腰を突き上げた。
飛鳥の軽い身体が持ち上がり、悲鳴のような嬌声が地下室に響い

た。
弛緩した股座からは潮が漏れだし、私の腹の水浸しにしていく。
粗相をした飛鳥をしつけるように、私は腰を打ち付けた。
がくがくと揺れる瞳に力は宿っていない。
されるがままに精を注がれる。
飛鳥の火照った肌はただ静かに快感にうち震えていた。

●月●日

調教開始十日目。
飛鳥は私の指示に粛々と従うようになっていた。
抵抗は無駄、すればするほど仲間に危機が及ぶ可能性が高くなる。
私の虚言を自分に言い聞かせるよう、黙々と性行為を行う。
そうしないと自覚してしまうからだろう。
既に身体は男を求め始めていることを。
自分の中に眠っていた飢えに、飛鳥は少しずつ気がつき始めているようだった。

●月●日

調教開始十一日目。
仕上げに取りかかる。
私は飛鳥に与える餌の量を、少しずつ減らすことにした。
いつものように裸体の飛鳥を責める。
が、いつものように絶頂まではしてやらない。
昇天する寸前で指を止め、私は飛鳥に着衣を促す。
飛鳥は困惑していた。
火照った身体をぎゅっと抱きしめ、私の顔色を伺っていた。
私は少し休憩をやると飛鳥に伝えた。
なにか言いたげな飛鳥に背を向け地下室をでる。
場所を移して私は地下室の飛鳥の様子を見ることにした。

何台も取り付けてある隠しカメラが、ベッドに静かに座る飛鳥を捉えていた。
飛鳥は股の間に手を挟み、もじもじと切な気に俯いていた。
危うく自慰行為に走りそうな我が手を、押さえ込んでいるようだ。
ここ数日で教え込まれた鮮烈な快楽は、すぐに忘れられるものではない。
内から湧き上がってくる情欲を、飛鳥は必死に堪えていた。

●月●日

調教開始十二日目。
今日は更に愛撫の時間を減らした。
裸になった飛鳥を軽く触って、それでおしまいにした。
私がいなくなった地下室では、昨日よりも辛そうにベッドに腰掛けている飛鳥の姿があった。
股に挟んだ手は今にも動き出しそうだった。

●月●日

調教開始十三日目。
本日飛鳥に与えた愛撫はほんの僅だった。
服の上から局部を軽く弄る。それだけだ。
一人になった飛鳥は、長い時間耐えていたが、遂に自分を慰め始めた。
私が教えたやり方で秘所を弄る。
空いた手で乳房を揉み、与えられてきた快楽を思い出そうとしていた。

●月●日

調教開始十四日目。

本日は与える快楽を絶つことにした。
地下室に向かうことを止め、その様子はカメラで覗き見る。
私が来るのをじっと待っていた飛鳥だったが、堪えきれず一人遊びを始めた。
女陰に指を入れ、中をかき回し、勃起した淫核を弄る。
飛鳥は何度か絶頂した様子であったが、満足していないと、自慰を続けた。
彼女が思い出していたのは、自分の指の感触と、私の肉棒の固さだったのだろう。
どんなに指を奥へ入れても届かない、最奥を犯される快感を、飛鳥は必死に求めていた。
明日は彼女に足りないナニかを教えてやるとしよう。

●月●日

調教開始十五日目。
地下室の扉を開けると、濃密な女の臭いが私を出迎えた。
飛鳥はベッドの上に腰掛けていた。
着衣は乱れ、その隙間から見える肌はほんのり赤く染まっている。
飛鳥はあふれでる情欲を堪えながら私を見上げた。
その期待に答えるよう、固くなった一物を露にする。
四日ぶりの肉棒を見て飛鳥が唾を呑んだ。
しかしすぐに視線を逸らし、欲に流されまいとする。
私は飛鳥に服を脱ぐよう指示を出した。
飛鳥の脱衣に躊躇いはなかった。
すぐに一糸纏わぬ姿になる。
その腹に肉棒を押しつけながら私は問うた。
これが欲しいのか？
起立する肉棒に落ちていた飛鳥の視線が上を向いた。私の顔を見た。
なけなしの理性が情欲を押さえ込み、唇から言葉が溢れるのを止め

ている。
私は更に言葉を重ねた。
君が望むようにしてあげよう。
君はどうして欲しいんだ？
肉棒が浅く飛鳥の腹部に沈む。
飛鳥はまだ答えない。だから最後に一押ししてやる。
大丈夫。いつものようにすればいいんだ。
もう散々してきたんだ。我慢することはない。
私の囁きに飛鳥の唇がぴくりと動いた。
今まで行ってきたことを思い出し、彼女の指が陰部へと伸びる。
どうか私を犯して下さい、と。
飛鳥は答えた。
いつものように、自らの意思で歪められた選択肢を選んだ。
いつもと違うのは、その選択肢は飛鳥が自ら思いついた言葉であるということだ。
拒否することも答えぬことも出来ただろう。
けれど飛鳥は快楽を選んだ。
理性は快楽を刻み込まれた肉欲に勝てなかったようだ。
私の男根を招き入れるため、飛鳥は指で女陰を広げた。
滴る雫を肉棒に馴染ませ、私は飛鳥を一気に貫いた。
快感に飛鳥は仰け反った。
私が腰に手を回していなければ、そのまま後ろに倒れ込んでいただろう。
飛鳥の口からは漏れる喘ぎは悲鳴に近いものだった。
男と女の身体がぶつかる度、あらゆる体液が飛び散った。
飛鳥も私も、目の前の異性の身体を貪る事しか考えていなかった。
精液を吐き出した私の男根は更に固さを増していた。
激しくなるピストンを飛鳥の身体は受け止め続けた。
お互いの絶頂は二度でも治まらず、精も根も尽き果てるまで、獣のような交尾は続いた。

●月●日

調教開始●●日目。

この書き出しも久しぶりである。

気がつけば書き込むことを忘れていた手帳を見つけ、こうして最後に飛鳥の様子を記すことにした。

女の悦びを知った飛鳥は、仲間のことを忘れ快楽に溺れる雌犬と化していた。

今や命令する前に、口でも秘所でも自ら肉棒を咥え込む。

特に口でしゃぶるのが好きなようで、餌を求める子犬のように、赤い舌で肉竿を責め立て、出てきた精を綺麗に飲み干す。

その顔に昔のあどけなさは残っていない。

今の飛鳥は、娼婦よりも淫靡な表情で男に奉仕する従順な女になっていた。

くノ一調教日記・夜桜

●月●日
本日より日記をつけることにする。
丁度書くことが出来たからだ。
いい女を一人捕らえた。
くノ一の夜桜（よざくら）という女だ。
巨大な義碗を振り回し暴れまわっていたところを、私の懐刀達が無力化した。
馴染みの呪術師は明日にでも、くノ一の力を封じて我が家に送ってくるだろう。
それが楽しみでならない。
本日は夜桜を嬲る様子を記す、その練習がてら手帳を開いた。

●月●日

調教開始一日目。
夜桜が届いた。
地下室に縛り上げられている少女の姿は、想像以上に私の興奮を駆り立てた。
古風な喋り方をするくノ一は、一糸纏わぬ姿であっても毅然とした態度で私と相対していた。
私はたゆんと揺れる夜桜の乳房を指で揉んだ。
柔らかくて張りがある立派な乳である。
乳首は鮮やかな桃色をしている。
私の指が胸に沈むと、夜桜は殺意を向けてきた。
しかし全ての力を封じられ、武器を奪われた非力な少女にはどうすることも出来ない。
構わず私は乳を揉み続けた。
夜桜は延々と呪詛の言葉を吐き続けていた。

●月●日

調教開始二日目。
引き続き夜桜を嬲る。
早くも夜桜の声には悦楽の色が混ざり始めていた。
乳首だけをひたすら責め、時に口に含んで吸ってやると、夜桜は声を堪えるため唇を噛んだ。
大きな乳房は非常に遊び甲斐がある。
男の理想、男の欲望が詰まっている。
私は夜桜の勃起した乳首に自身の勃起を押し当てた。
固い乳首と柔らかな乳房が私の男根を気持ちよくしてくれる。
弄ぶように肉棒で乳房をつつき、その先を乳頭に擦り付けると、私はだらしなく果ててしまった。

●月●日

調教開始三日目。
夜桜に唾を吐きかけられた。
昨日と変わらず乳首に愛撫をしていた時の事である。
拘束していなかった夜桜の口から、唾液の塊が私の顔に飛んできたのだ。
じゃじゃ馬娘はひたすら嬲れ続ける事を良しとしなかった。
怒りは特に湧いてこなかったが、こういう状況ならではの弄び方を思いついたのでやってみた。
悪い娘にするお仕置きといえば尻叩きである。
私は鎖で吊るされていた夜桜の尻を叩いた。
乾いた音が響き、白い大きな尻がぷるんと跳ねた。
安産型の臀部はあっという間に赤く腫れた。
夜桜は悔しそうに呻いていた。
身動きさえ取れればすぐにでも殴り殺してやるのに。

そう険しい顔が語っていた。
そんな顔をされるとますます弄びたくなる。
私は夜桜の尻に膨張した肉棒を擦り付けた。
再び感じる肉の熱さと、引いていない痛みで夜桜は悲鳴を上げた。
私の剛直は更に固さを増した。
夜桜の尻を犯すように、その柔らかな肉をへこませていく。
ぺちぺちと音を立て、先走りに濡れた亀頭で尻肉を叩いてやると、夜桜の悲鳴は止まらなくなる。
夜桜の尻の割れ目に男根を挟み豊かな肉で竿をしごくと絶頂はすぐに訪れた。
脈打つ肉棒から飛び出した精液が、夜桜の身体を汚した。
赤い尻にかかった白濁を塗り込むように塗ってやると、夜桜の殺意は限界まで高まった。
その声がまた私を滾らせるとは知らずに。
夜桜は声の限り罵声を飛ばし続けていた。

●月●日

調教開始四日目。
昨日は痛みを与えた夜桜の尻を、今日はゆっくりと愛撫することにした。
まだ腫れが引いていない尻を優しく撫でてやる。
夜桜の口から小さな悲鳴が漏れた。
痛みとは違う感覚はひりつく尻によく響いたらしい。
震える臀部を撫で続け、指の感触を教え込む。
口を開けば罵声以外の言葉が飛び出しそうなのか、夜桜の唇は固く結ばれたままだった。

●月●日

調教開始五日目。

本日も夜桜の尻を虐めてやる。
叩き、撫で、そして揉みしだく。
指の骨が張りのある尻肉に沈むと、夜桜の背筋がぶるりと震えた。
あっけなく夜桜の秘所に汁気が満ちてきた。
私は肉の割れ目を指でなぞる。
指の腹についた透明な液体を夜桜に見せつける。
夜桜は唇を噛みながら目を逸らした。
私の陵辱で自分の中の女が燻った。その事実を認めぬよう、瞳を閉じた。
ならば見なくてもわかるようにしてやろう。
私は夜桜の秘所に指を入れた。
既に濡れていた女陰はあっさりと私の指を飲み込んだ。
熱い膣内を音をたてて掻き回す。
地下室に響く粘質の水音はどんどん大きくなっていく。
秘所をぐちゃぐちゃに陵辱され、夜桜の口から遂に声が漏れた。
熱の籠った吐息は彼女が快楽を感じ初めている証拠だ。
更に苛烈に指で遊んでやるとあえなく夜桜は絶頂した。
必死に快楽に耐えていた女が、それでもたまらず昇天する。
その姿は相変わらず私を滾らせるものであった。

●月●日

調教開始六日目。
本日も夜桜を調教した。
尻を愛撫し、刺激を感じて濡れてきた女陰を大袈裟に広げる。
指で無理やり開かれた夜桜の秘所はぴくぴくと蠢き、更なる刺激を求めていた。
夜桜は絶叫した。
羞恥に悶え足を閉じようとする。
しかし手足に絡まった鎖がそれを許してはくれない。
必死に私を罵倒し、この醜態を何とかしようともがいていたが、そ

の抵抗は私を興奮させるだけだ。
私は夜桜の秘所に舌を入れた。
濃密な女の匂いが鼻孔を満たす。
垂れてくる雫を舐めとると、夜桜の雑言は快楽に喘ぐ声へ変わった。
嫌悪すべき男の舌使いを夜桜はお気に召したらしい。
こんなはずでは。と否定の言葉も弱々しく、開いた口から吐息を漏らし続けていた。

●月●日

調教開始七日目。
本日は夜桜の初めてを奪ってやった。
連日の愛撫で快楽を覚えた夜桜の身体は、すんなりと濡れて男を受け入れる準備を整えた。
舌で淫核を転がし、夜桜が三度目の絶頂を迎えたのを確認した私は、いきり立つ肉棒を夜桜の股に押しつけた。
夜桜の制止の声は弱々しかった。
無理やり与えられた快楽がまだ抜けきっていないようだった。
力が抜けた夜桜の女陰は、すんなりと私の男根を受け入れた。
肉棒が膜を破り最奥まで到達すると、夜桜は悲鳴をあげた。
好きでもない男に処女を奪われたくノ一は乙女のように涙を流し始めた。
忍とはいえ、刃の下に隠せぬ心情もあるようだ。
ぎちぎちと肉棒を締め付ける夜桜の反応を楽しみながら、私は腰を使い始めた。
夜桜の涙はすぐに悦びの声へ変わった。
つい先ほどまで未通であった女の物とは思えない具合の良さに、私も思わず呻いてしまった。
一流のくノ一には子作りの才もあるらしい。
困惑と否定の声を上げる夜桜の尻を強く掴み、私は子宮の奥まで届

くよう、しっかりと種付けした。
どくどくと射精する肉棒を夜桜の膣は尚も締め上げてくる。
一滴も精液を残らず搾るその脈動に、私の吐精は随分長くなった。
たっぷりと精を吐き出し、少し萎びた陰茎を夜桜の秘所から引き抜き、私は夜桜の才を誉めた。
こんなに子作りしたがる身体は初めてだ。
私の声を否定する夜桜の声はとても弱々しいものだった。

●月●日

調教開始八日目。
昨日に引き続き夜桜に精を注いでやった。
夜桜の女陰は昨日に増して、男を求めるようになっていた。
一度精液を浴びた夜桜の女体は、私の男根を貪欲にぎゅうぎゅうと締め付ける。
まさに名器といって言い夜桜の膣に、私の男根を覚えさせる。
ゆっくりとした腰使いで夜桜を責めてやると、呆気なく沈黙は破られた。
快楽に上擦った罵声は、私の興奮を増長させた。
嬌声混じりに殺してやると言われても、竿が固くなるばかりだ。
再び昨日と同じ場所に射精してやると夜桜は絶頂した。
射精の熱にがくがくと腰を震わせ、子を孕む事に恐怖を覚えているようだった。
妊娠することを恐れている夜桜に私は何度も子種を吐き出した。
確実に孕んだであろう。夜桜がそう思い屈服するまで。
私の欲望は尽きそうになかった。

●月●日

調教開始九日目。
夜桜の具合は日に日に増していた。

一昨日より昨日。
昨日より今日。
精液の味を覚える度、夜桜の女陰はもっと男に媚びる形になっていく。
私が射精する速度も、夜桜が絶頂する速度も交わる度に早くなっていた。
夜桜は未だに私を拒絶していたが、火照った身体は彼女の意思とは裏腹に、私の種を求めている。
それを理解させてやる為、私は夜桜の一番奥で精を吐いた。
射精の勢いと精液の熱で夜桜は絶頂していた。

●月●日

調教開始十日目。
夜桜はすっかり男の味を覚えていた。
あっという間に濡れそぼる女陰は、子種をねだるように肉棒をねぶる。
大きな尻を鳴らして犯すと、夜桜は悲鳴のような嬌声を上げ始めた。
夜桜は頑なに認めようとしないが、その身体は子作りに悦びを感じ始めている。
男を咥え込むことに躊躇いがなくなったことを指摘してやると、夜桜は顔を真っ赤にして快楽を否定してきた。
ずぶずぶと快楽によがる膣を見せながらそんな顔をされても説得力はなかった。
私は降りてきている夜桜の子宮の入り口を小突いた。
夜桜の嬌声は一段と高くなった。
私はまた彼女の子宮に精液を出してやった。
恥態を散々見せつけられ、固くなっていた私の肉棒は、大量の精液で夜桜の胎を汚した。
精液を綺麗に飲み込んだ夜桜の下腹部を撫でてやる。

よくやった。と夜桜の女を褒めてやる。
絶頂の余韻に浸る夜桜は、嬉しそうに弛緩した肢体を震わせていた。

●月●日

調教開始十一日目。
仕上げに取りかかる。
今日の性行為には避妊具を用いた。
夜桜の要望に答えたという体で、彼女が唾棄しつつも渇望していた精液を、薄い袋の中に出すことにした。
ゴム越しの夜桜の膣内も気持ちがよかった。
しかし私を一番楽しませたのは、夜桜の反応だった。
汚らわしい液体を注がれずに済むというのに、いつになく浮かない顔をしている。
釈然としない表情の夜桜に、射精したばかりの精液で膨らんだ避妊具を見せてやると、その顔に刹那の欲情が伺えた。
まだ本人は認めていないが、彼女の身体が避妊具の中身を求めていることは明白だった。

●月●日

調教開始十二日目。
本日も避妊具を用いて夜桜を犯す。
昨日と変わらず夜桜はどこか寂しげな顔をしていた。
まだ本人はその事に気がついていない。
それを教えてやるよう、使用済みの避妊具の中身を夜桜の顔にかけてやる。
青臭い精液が夜桜の端整な顔を汚し、彼女は私の行為に顔をしかめた。
いつぞやのような殺意は向けられなかった。

昨日よりも悦んでいる女を隠すのに必死だったからだろう。
夜桜の余裕は徐々に消え始めている。

●月●日

調教開始十三日目。
避妊具を用いた性交も本日で三日目だ。
夜桜の疼きは増しているようだ。
言葉で否定してもその頬の紅潮、吐息に籠った熱は誤魔化せない。
薄い皮膜越しに感じる雄では物足りないのだと。
夜桜の膣が痛いくらいに私を締め上げてきた。
しかし、どんなに快楽を与えても子種はやってこない。
一向に熱が吐き出されない夜桜の子宮は、私を責めるように下がっていた。
やはりこの女の才能は素晴らしい。
ゴムを隔てた射精は夜桜の女をこれ以上なく燻らせているようだった。

●月●日

調教開始十四日目。
本日一度目の射精は避妊具の中で行った。
相も変わらず子種を寄越さない性交に、夜桜の女陰はだらだらと愛液を垂らしていた。
餌を目の前にしてお預けを食らった犬のように、開いた下の口から汁が零れている。
そんなに欲しければくれてやるぞ。
と、私は避妊具を外した肉棒を夜桜の入り口に擦り付けた。
途端に夜桜の身体が歓喜に震える。
避妊具の中に出した時に付着した精液を夜桜の女陰に男根を使って馴染ませる。

それだけで夜桜は絶頂した。
最早是非を語る口すら満足に動かせない夜桜の尻を掴み、女陰を広げて私は一気に彼女を貫いた。
絶頂に次ぐ絶頂。
夜桜は失禁した。鎖で吊られていなければ倒れ込んでいたであろう。
震えと嗚咽のような嬌声を上げる夜桜を私は犯していく。
夜桜の身体は久しぶりの精を搾ることに必死だった。
膣は締まり、愛液は肉棒の動きを良くし、男を気持ちよくさせることに余念がない。
あえなく私は射精してしまった。
久しぶりの生の感触は夜桜だけのものではなかった。
その具合の良さは正に至高ともいえる快楽を私に与えた。
やはり何度味わっても夜桜の良さは変わらない。
彼女の名器を改めて体験した私の男根は、二回目だというのに大量の精液を吐き出した。
びくびくと脈打つ肉棒を夜桜の秘所が更に締め付ける。
一滴残らず搾り取るつもりなのだろう。
私もその動きに応え、夜桜の尻を掴んで肉棒を最奥にぴったりと押し付ける。
長い時間を要した種付けは、夜桜の意識を完全に飛ばしていた。
次に目が覚めたとき、夜桜はきっと思い知るだろう。
己の中にある欲情と、それがもたらす快楽を。

●月●日

調教開始●●日目。
日記を始めると度々途中で書かなくなる。
私の悪い癖である。
そんな自分を戒めるため、夜桜のその後を書くことにした。
すっかり子作りにはまった夜桜は、毎晩私の精を求めてくるように

なっていた。
早く孕ませて欲しいと子種をねだる彼女の姿を見ていれば、それだけで股間がいきり立つ。
その猛りを夜桜は艶やかな笑みで咥え込む、そんな女に変わっていた。
彼女が私の子を孕む日も近いだろう。
母になる日を楽しみに待つ、今の夜桜からはくノ一の矜持など微塵も感じることは出来ない。
夜桜はただ私を求め、私に媚びる女に堕ちた。

くノ一調教日記・日影

●月●日

女を一人捕らえた。
名前は日影（ひかげ）というらしい。
闇の世界ではそれなりに名前の通ったくノ一は見目麗しい少女であった。
胡乱な瞳と人形のような無表情。
感情が無いから何をしても無駄だという日影が快楽によがる様を見てみたくなった私は、その身体を弄ぶ様子をこうして紙に記すことにした。
鎖で縛り上げられ、衣服を剥ぎ取られても日影の表情は変わらなかった。
その膨らんだ乳房に触れてみても、日影の様子に変化はない。
ぐにぐに揉んでやっても身じろぎひとつしない。
不感症なのか、本当に感情が無いのか。
どちらにせよこの肉体を弄べることに違いはない。

●月●日

調教開始一日目。
感情が無いと言う日影の身体を丁寧に揉んでやった。
言うだけあって全身撫でまわしても、その顔に嫌悪や怒りの色は見えない。
流石に乳首をこねくり回された時は少々こそばゆそうにしていたが、声をあげることはついぞなかった。
私はまるで人形を弄んでいるような感覚に陥った。
しかしそれもまた一興である。
物言わぬ人形であるというのなら、相応の楽しみかたをするとしよ

う。
私は日影の秘所に指を伸ばした。
膨らんだ割れ目を指の腹でなぞると、日影の頬が僅かに動いた。
ゆっくりと、丁寧に。
日影の女陰を指で弄ぶ。
じっくりと時間をかけ、その身体に快楽というものを馴染ませていく。
懸命な私の指使いが、少しずつ日影の女に火を灯し始めたようだ。
長い時間愛撫をしていた私の指先は、ほんの少しだが汗ではない液体で濡れていた。

●月●日

調教開始二日目。
昨日と変わらず日影に愛撫をする。
今日は潤滑剤を使い、膣の中を指で擦ってやることにした。
滑りがよくなった指はすんなりと日影の中へと侵入する。
入り口から指を奥へ奥へと進めると日影が小さく吐息を溢した。
未だに無表情を保っているが、膣の中はじっとりと熱い。
まだ知らぬ快楽を教えてやる為、私は指で日影の膣壁を擦り始めた。
日影の弱点を探るように、指で少しずつ膣をかき回していく。
日影の反応が良かったのは以外にも浅い場所で、入り口のすぐ真上だった。
私は日影の身じろぎを指で責め立てる。
ぐちゃぐちゃと音が立ち、日影の吐く息に段々と熱が籠っていく。
彼女の能面は剥がれ始めた。
これからの調教でどんな反応が見られるのか。楽しみである。

●月●日

調教開始三日目。
本日は指と口を使って日影を責めた。
まだ湿っていない女陰に舌を這わせる。
淡い桃色をした肉襞がぴくりと動く。
昨日までのものとは違う感触に日影の胡乱な瞳が揺れた。
私の舌は日影の中に埋まっていた淫核を掘り起こすように動き回る。
刺激に耐えきれず、日影の女陰は湿りを帯び始めた。
淫核が徐々に膨らんでいく。
はっきりと形がわかるようになったソレを舌で突きながら、指を膣へ挿入。
舌の動きに合わせて膣壁を擦る。
何度も執拗に責められ、日影の女陰からは汁が垂れるようになった。
声は上げぬものの、その仏頂面に朱が差し始めている。
昨日よりもよい反応になってきた。
日影の身体は着実に快楽を覚えているようだった。

●月●日

調教開始四日目。
遂に日影が絶頂した。
声を上げることはついぞなかったが、膣の中が熱く締まりぽたぽたと垂れる液の量を見れば、彼女が昇天したことは明白だ。
私は日影にその事実を伝えた。
日影は小首をかしげていた。
どうやら絶頂というものが、一体どういう感覚なのか、知らなかったらしい。
それならば、と。
私は日影にたっぷりと絶頂することを教えてやる事にした。
先ほどの快楽が抜けきらない日影の女陰を指で激しく責め立てる。

中をかき混ぜ、淫核を口で吸い付き、敏感な場所を舌と指で愛撫する。
勃起した肉核を甘噛してやると、日影の女陰はひくひくと震えを大きくした。
日影は激しい困惑に教われている様子だった。
初めて知った抗い難い快楽に戸惑っていた。
しかし二度目、三度目と絶頂を繰り返していくうちに、その快楽にも慣れ始めたようだ。
女の喜悦に流されまいと下唇を噛むその姿には、はっきりとした抵抗の意志が見える。
感情が無いと言っていた女にははっきりとした色情が伺えるようになっていた。

●月●日

調教開始五日目。
日影は日に日に快楽に溺れていっている。
昨日と同じように秘所を責めてやると、昨日より早く日影は絶頂した。
膝は震え口の端から唾液が漏れている。
ポーカーフェイスを保つのも難しくなってきているようだ。
私はじっくりと焦らすように日影の女を掻き回した。
すでに蕩けていた穴の中。見つけた弱点を指で擦る。軽く爪を立てる。
肥大した淫核を口の中で転がしながら愛撫を一時間ほど続けてやると、日影の股ぐらは潮を噴くことを厭わなくなった。
日影は快楽に呑み込まれそうになっている自分を必死に誤魔化していた。
その言葉が聞こえる度、私は愛撫を激しくした。
いつしか日影の口から溢れるものは、快楽に喘ぐ声だけになっていた。

●月●日

調教開始六日目。
本日は日影が失神するまで虐めてやった。
昨日までと同じような愛撫を繰り返し、ほぐれた膣に玩具を挿入する。
男の竿を模したソレが日影の中を擦る度、彼女は声を漏らす。
快楽に歪みそうな唇を噛み締め、日影は私の愛撫をこらえていた。
しかしそんな日影の意識とは裏腹に体の火照りを増すばかりだった。
我慢をすればするほど、孔から滴る汁の量が増えていく。
白く濁った愛液は抽挿を加速させ、ぐちゃぐちゃと秘所を掻き回されていた日影は遂につぐんでいた口から嬌声をこぼした。
そこからはもう、日影の絶頂が止まることはなかった。
快楽に身を委ねてしまった無表情なくノ一は、紅潮させた頬を緩めて愛撫を止めるよう懇願してきた。
これ以上はどうにかなってしまう。と訛りの強い日影の言葉を無視して、私は彼女の肉体に快感を教え続ける。
時間を忘れひたすらに日影を責め立てた後、だらんと力の抜けた彼女の足元には湯気立つ体液で水溜まりが出来ていた。

●月●日

調教開始七日目。
遂にこの時がやってきた。
日影の肉体を味わうことにする。
愛撫もそこそこに、私はいきり立つ己の肉棒を日影の膣に挿入した。
おおよそ一週間ぶりとなる射精に至るまで、時間はかからなかった。

汁気の多い日影の中は熱く蕩け、私という男をすんなりと受け入れた。
その先にある未知の快楽を求め、貪欲に肉棒をしゃぶる肉の壁に精を吐き出すと、日影は悲鳴のような嬌声を上げた。
今まで散々見てきた女の無表情が崩れる瞬間は行為そのものか、それ以上に私の興奮を掻き立てた。
欲に溺れた日影の恥態をありありと見せつけられた私の肉棒は、すぐに固さを取り戻し、再び日影の中を蹂躙し始める。
乱雑にかき混ぜられ、誰のものとも解らなくなった体液が日影の秘所から滴り落ちる。
行き着く暇もなく秘所をえぐられ続けた日影の絶頂は止まることなく、萎びた男根が割れ目から抜け落ちるまで何度も昇天していた。

●月●日

調教開始八日目。
本日も私は己が欲望の赴くまま、日影を犯した。
女の背中に覆い被さり細い手首を押さえつけ犯してやると、日影は喉の奥を震わせた。
尻の肉が私の腹に潰され歪み、日影の女陰がきゅっとしまる。
首筋に歯を立ててやると、無表情を保っていた女の顔はぐしゃぐしゃに崩壊する。
精が尽き果てるまで何度も私は日影の体のに射精した。
任務に使うため鍛え上げた引き締まった肢体を、女らしい膨らんだ柔らかい乳房や尻を、男を悦ばせる密壺を、私の体液が白濁に染め上げていく。
行為に興じる私を見る日影の瞳には、情欲に煽られた熱が籠り始めたていた。

●月●日

調教開始九日目。
更に日影の身体に快楽を仕込んでいく。
裸に剥かれた日影の雌穴に振動する玩具を押し込むと淡い艶声が出た。
自分の秘所から垂れる汁と器具と膣壁が擦れて鳴る水音に、女の頬は赤らんでいく。
幾度かの性交を経て、戦うために鍛え抜かれ女の体は、雄を悦ばせる雌の色情に染まってきていた。
陰核や乳首を刺激して、この快楽を忘れられぬようしっかりと刻み込む。
床に広がる体液の匂い。
体の自由を奪われ一方的に刺激を与え続けられた日影は、力なく開いた秘所から愛液をこぼし続ける。
絶え間なく与え続けられた快楽が、女の意思を粉々に砕いたのだと。
その相貌を見ればはっきりとわかる。
日影の弛緩しきったその顔は、最初に見たあの無機質な表情の作り方をすっかり忘れているようだった。

●月●日

調教開始十日目。
仕上げにかかることにしよう。
先日と同じように愛撫を続け、汁の滴る穴にゆっくりと挿入する。
みっちりと隙間なく埋められた日影の膣内を堪能しながら、私はたわわに揺れる乳房を指で摘まんだ。
必死に口をつぐむ日影の横顔を後ろから眺めながら乳房への愛撫を続けると、私の肉棒を咥え込んだままの女陰が、ひくひくと脈動を繰り返す。
少しずつ腰を動かし始めると、その震えはどんどん大きくなっていった。

これまでの性交とは異なるゆったりとしたピストンは、日影の頭の中を蕩けさせているようだった。
つぐんでいた口から淡い艶声が漏れると、女の肉壁が更に締め付けを増してくる。
その快楽に思わず精を吐き出してしまいそうになる。
それを堪えてまぐわい続けると、日影の背中がぶるりと震えた。
日影の絶頂を感じ取った私の腰の動きが速くなる。
こちらも限界は近かった。
それでも我慢に我慢を重ね、時間をかけた性交の果てに、私の一物から吐き出された精液の熱さに、日影は憚らず声をあげてオーガズムを感じていた。

●月●日

調教開始十二日目。
昨日に引き続きゆっくりと時間をかけて日影を犯すことにする。
体位も昨日と変わらず、手足を縛った日影の背後から肉棒を突き入れる。
手足の拘束で体の自由を奪われた日影の肢体を、更に私の手足が押さえつけ、身動きすら許さない密着を女の体に教え込む。
挿入したまま乳房を撫で回されると、日影はすぐに絶頂した。
荒い呼吸を繰り返す日影を容赦なく攻め続けられた女の秘所から、潮が噴き出した。
その快感を何度も、気が遠くなるなるほど時間をかけて、日影の体に教え込む。
決して忘れられぬよう、私の男根が緩慢に日影の女陰を蹂躙していく。
日影の横顔はすっかり快楽に墜ちた女のそれになっていた。
感情が無いと嘯いていたあの日が懐かしい。
蕩けた女の顔を見ながら私の肉棒は精をたっぷりと吐き出した。

●月●日

調教開始十三日目。
日影の嬌声は私への嘆願へ変わった。
もう犯さないで欲しい。
これ以上快楽を与えられたら壊れてしまうと。
憮然とした表情を涙でぐしゃぐしゃに崩したその顔は、凛然としたくノ一のそれから快楽に溺れもがいている少女のものになっていた。
そんな顔を見せつけられたのだからもうたまらない。
怒張した私の男根は、日影の願いを無視して彼女の胎を犯し始めた。
なおも続く凌辱が日影の理性を溶かし尽くすまで時間はかからなかった。
日影の口から漏れていた悲鳴は、いつしか快楽を貪る嬌声に戻っていた。
だらしなく口からこぼれた舌を吸われても、私の舌がその口腔まで犯し始めても、弛緩した日影の体はされるがままを受け入れている。
そうして精も根も尽き果てるまで犯し抜かれた日影の身体は、すんなりと男を咥え込む熟れた女体へ堕落していた。

●月●日

最後にその後の経過だけ記して日記を終わりにしようと思う。
あれから幾度となく交わされた日影との情愛は今も続いている。
私の女として仕上がった日影は、長い時間をかけた蛇のような交尾を好む。
舌を絡ませ、手足を巻き、ゆっくりとお互いの性器を刺激し合う。
その極上の快楽に虜になったのは私も同じだった。
この雌を手放してはならぬと、己の性で日影の胎を満たす。
その熱に煽られた日影が、更に雄を搾り取ろうと身体の全てを使って私を締め上げる。

感情が無い、と宣っていた少女の顔は情欲に満たされ醜く、そして美しく歪んでいた。

くノ一調教日記『追記』

くノ一調教日記・焔『追記』

私が帰宅すると焔(ほむら)はすぐに駆け寄ってきた。
頭の後で束ねた長い黒髪を揺らして私に抱きつくその姿は、よく懐いた大型犬を起草させる。
くノ一であった彼女を捉え、従順な女に調教してから幾日も経った。
最初の反抗的な態度は消え去り、今では立派な私の性処理道具として、その役目を貪欲に全うする存在になっていた。
「んぅっ……。ちゅう、んっ……」
私の首に腕を回し、焔は唇を合わせてきた。
熱い舌が私の唇をこじ開け、唾液と共に口腔に侵入してくる。
ぬるぬると蠢く舌と舌が、蛇の交尾のように絡み合い、身体が一気に熱くなっていく。
「ちゅっ……むぅ、んんぅ……」
僅か二日程の空白でも、焔にとっては一日千秋の思いだったのだろう。
私の感触を思い出す為に、焔は何度も唇を重ねてくる。
情熱的で深い接吻は、私の情欲に火を付け始めていた。
血が通い始めた男根は、穿いていたズボンの上からでもわかるほど膨らみ、固くなっている。
焔はそれを愛しそうに撫で始めた。
二重の布越しでも、焔の指先の柔らかさと艶かしさは伝わってくる。
裏筋に指を這わ、亀頭の先を指でつつく。
「……ちゅっ、ぷ。……随分、溜まってるみたいじゃないか……。嬉しいぞ」

紅潮した顔の焔の唇を吸う。
やられてばかりでは主の名折れである。
主導権はこちらにあるのだ。そう生意気な奴隷に教えてやるため、私は焔の黒いスカートの中に指を入れた。
「あっ……、うむぅ……。ちゅぅぅ」
焔のスカートの下に下着はなかった。
準備のいい女である。
私の指は阻まれることなく、既に濡れていた秘所に吸い込まれる。
くちゅくちゅと舌の動きとは別の水音が生まれた。
ゆっくりと割れ目を撫でると、焔は私の口の中に吐息を漏らす。
負けじと焔も私の肉棒をしごいてきた。
ズボンのチャックを下ろし、出来た隙間から陰茎を取り出すと、焔の指が妖しく動き出す。
先走りの汁で濡れていた肉竿は、焔の手に揉まれると更に固くなっていく。
愛液が溢れた焔の性器に指を差し込むと、少女の身体がぶるりと震えた。
「はぁっ、んっ、ちゅぴっ……。んぅ……！」
互いを求める速度が上がっていく。
焔の指が私を責め立て、私の指は焔を責め立てる。
飢えていたのは私も同じであった。
手塩にかけて調教した至高の女体を、二日も味わっていないのだ。
溜まりに溜まりった情欲は、私を知り尽くした焔の手淫の快楽に震え始めていた。
同様に焔の肉欲も、止めどなく溢れ出てきている。
「んんっ……ちゅぅぅっ……、はぁ、もっとぉ、してくれぇ……。わたしもぉ、いっぱいぃ……、なでなでするからぁ……」
焔の蕩けた声が私の脳髄の奥深くまで染みわっていく。
潤んだ視線が背筋をぶるぶる震わせる。
私の股間ははち切れんばかりに膨らみ、今にも精を吐き出さんと、焔の手のひらを犯していた。

「いいぞぉっ、らしてぇ……。……ちゅうっ、ちゅぴっ……。いっぱい、びゅうびゅうだしてくれぇ……♡」
焔の指が私の一物を更に締め上げた
ぐちゃぐちゃと音を立て、肉竿をしごく速度を上げた。
今にも射精しそうな快楽を私は堪え、お返しとばかりに焔の女陰を指で擦る。
淫核を指の先で潰して、快楽に喘ぐ焔の唇を奪い続ける。
「んむぅぅぅっ、んんぅ、いぅぅぅぅ!!」
達したのは同時であった。
私は焔の手の中に精液を吐き出し、焔は私の手を潮で濡らした。
互いの体液が混ざり合い、濃密な匂いを醸し出す。
長い絶頂の後、結んでいた唇を離すと、白く濁った唾液がぬらぬらと光の線を引いていた。
「……んちゅぅ……。んっ……。はぁ、ふぅ。……すごい量、出したな」
肉棒を握っていた焔の右手は大量の白濁液で汚れていた。
液と言うよりは固形物に近い塊を、焔は掬って口に含む。
「んっ……。……ちゃんと濃いな。浮気はしてないようでなによりだ」
指に付着した精液を舐めとる焔。
絡まり、糸を引く白濁を、焔の赤い舌がからめとっていく。
その様を見せつけられ、気がつけば私の下半身に再び熱が集まり始めていた。
それを見た焔が妖艶に笑った。
「ふふっ。まだまだ可愛がって貰うからな。覚悟しておけよ?」

●●

「ふぅ、はぁ……、んちゅぅ……」
焔と私は再び睦み合っていた。
玄関先で一旦昂りを慰め合ったのだが、それは浴場までしかもたな

かった。
ベッドに向かう前に私たちは、再び舌を絡ませていた。
焔の端正に整った顔は快楽に歪み、豊満な乳房を私の胸板に押しつけながら口づけを楽しんでいる。
「ああん、もっとぉ……」
出しっぱなしにしているシャワーの湯が、タイルと私たちの身体を濡らしている。
私が体を洗っている最中、我慢が出来なくなった焔が、日焼けした小麦色の肌を押しつけてきた。
そしてそのまま行為に発展している。というわけだ。
椅子に腰掛けている私の膝の上。
立っていた玄関先の接吻とは違い、少し高い位置から焔の舌が私の口に滑り込んできていた。
「はぁぁっ……、んむぅ……。……ちゅぅ、ぷはぁ。……おっきくなってきたな、お前のコレ」
情愛がまだ萎えていないのを充分確認した焔は、私の身体にしなだれかかってきた。
濡れそぼって滴の垂れる女陰を、私の男根に擦り付け、誘う蠱惑の笑みを浮かべる。

「なあ、しようぜ？　もうお前も我慢出来ないんだろ？」
シャワーを止め、くちゅくちゅと性器を擦り合わせる音を私に聞かせて挑発してくる焔。
しかし私はその誘いを毅然とした態度で拒否した。
何故ならまだ焔の乳を堪能していないからである。
私の指は真っ直ぐに、焔の豊満な乳房に向かって伸びた。
「あっ、んっ。……なんだよぉ、おっぱい大好きだなぁ、お前……」
お預けを食らった焔は、少々不満げだったが、乳首を指で摘まむと身をよじった。
「ああっ、あんっ。ぐにぐに、それぇ、好きぃ……」
焔の大きな胸を、形が変わるくらい強く揉む。

力強い愛撫は痛みの伴うものであったが焔は嬌声を上げている。
「あ、あああっ、いぃ……！」
焔の勃起していた乳首を指先で転がす。
焔の喘ぎは更に大きくなった。
「はぁっ、いっ、ああっ、こねこねもぉ、すきぃ……」
私の指の動きに合わせて、焔は腰を使い始めた。
反り立って剛直が肉の割れ目に僅かに食い込み、くちゅくちゅと音を立てている。
すぐにでも咥え込みたいのを我慢しているが、私をその気にさせようと挑発的な刺激を与えてくる。
「はぁ、はぁ、ああぁっ……！」
私が乳首に吸い付くと焔は艶かしく息を吐いた。
音を出し乳頭をなぶる。固くなっていた乳首を甘噛みすると、焔はびくんと背中を跳ねさせた。
「いぃっ……ああっ、ふぅぅ、ぅっ……！」
絶頂した様子の焔は腰を使うのを止め、快楽の余韻に浸っていた。
が、すぐに私を潤んだ瞳で見下ろすと、首に回していた手で、頬を撫でてくる。
「な、なぁ。もういいだろ？　いっぱい揉んだだろ？　早く入れてくれよぉ……。あの硬いのが欲しいんだ。早くチンポで私をぐちゃぐちゃにしてくれぇ……」
切なげな声をあげる焔。
絶頂したとはいえ、乳首への愛撫では物足りないらしい。
私もそろそろ一度射精してやりたいと思っていたところだ。
いいだろう。と許可を出す。
喜悦に頬を緩ませた焔は、指で私の男根を掴むと、躊躇いなく自身の女陰へと挿入した。
「あ、ああああっ、いいぃ……、くふぅぅぅぅ！」
充分に濡れていた膣内は、すぐに私の陰茎を最奥へと導いた。
焔の行き止まりまで、私の肉棒が滑り込み、卑猥な音を響かせながら入り口まで戻っていく。

「ああっ、いいっ！　チ、チンポぉ、かぁたいのぉ……！　こ、これぇ……、ずっと、欲しかったんだよぉ……♡」
卑猥な言葉を並べながら焔は腰を激しく動かしていた。
何度も交わり、私の形を覚えている女陰は、柔らかくほどけつつも、精を吐き出させる窮屈さも忘れてはいない。
焔の快感に合わせてきゅうきゅうと、私の陰茎は締め付けられていた。
「あっ、んっ、んんぅっ……！　あぁっ、ふ、くぅぅっ……」
焔の口からは溢れる喘ぎは、言葉を成さなくなってきていた。
一心不乱に腰を振り、背中を突き抜け脳に走る快楽を貪っている。
「いくぅ……、いってるぅ……！　いぃ、きもちぃぃ……♡」
蕩けた焔の顔を見ていると、こちらも限界が近くなってくる。
私のはち切れんばかりに膨らんだ男根は、焔の熱い膣の快楽にぴくぴくと震え始めていた。
「んんぅぅ！　いいぞぉ、いつ、でもっ、あいぃ……♡　しゃせぃ、……チンポじるぅ……、らしてぇ、くれぇぇ……♡」
焔は腰をぐいぐい押しつけ、快楽に痺れて溺れている子宮で、私の精を受け止めようとしているようだ。
愛らしく、健気に私を求めるその姿を見て、こちらも自然と腰が動き始めていた。
「あ、あああっ、いぃっ、んんぅぅっ！　いく、いくぅぅぅぅ！」
焔が絶叫した。
それと同時に私も射精する。
激しい熱の奔流が腹の底から湧き上がり、大量の体液となって焔のナカへと注がれていく。
びくびくと跳ねる小麦色に日焼けした尻を押さえつけ、精液を一滴たりとも逃さぬよう、しっかりと種付けする。
長い射精が終わるまで、私と焔は無言だった。
吐く息が段々と落ち着いてくる。
「はぁ、はぁ、んっ、んんぅ……。すごぃ、出したなぁ……♡」
焔は己の腹を撫でながら、嬉しそうに笑った。

「だけど、まだ、いけるだろ？」
焔の問いに首肯を返す。
夜はまだ始まったばかりである。

●●

性器での性交が終わった後。
私は焔に命令を出した。
浴場の壁に手を付き、尻を此方に向けるように言う。
嬉々として焔は私の指示に従い、大きく形のいい尻を私に突き出した。
焔の太ももに、先ほど膣に出した精が流れ出して白い線を引いている。
男と女が交わった、芳しい薫りが鼻孔を満たし、私の一物はすぐに固さを取り戻す。
さて、次は尻の穴を犯してやろう。
私は焔の閉じている肛門を指で撫でた。
「あ、んんぅ。……今度は、そっちでするのか？」
期待に上ずった焔の声が聞こえてくる。
指で入り口をほぐしながら、先ほど取りに戻ったローションを、焔のアナルに注入する。
「んっ、んんんっ……」
冷たい液体の進入に、焔の身体はぴくりと震えた。
焔の尻の穴は小さな容器に入っていたローションを難なく全て飲み込んだ。
焔はびくびくと喜悦に喘ぎ、行為が行われているすぐ下の女陰からは、愛液と精液が混じり合った塊が、ぽたぽたと溢れ落ちている。
「さ、さぁ。はやくぅ、もう準備は、いいだろ？」
私を急かすように焔は指で尻の穴を広げ始めた。
広がった穴から溢れるローションを亀頭に塗りつけながら、私は焔の肩を掴む。

体重をかける。狭い穴を抉じ開けるように、私の肉棒は焔のアナルに入っていく。
「おっ、うぅぅ。き、きたぁ、……チ、チンポ、きたぁ……♡」
ぬぷぬぷと焔のアナルは私の陰茎を咥え込む。
長い時間をかけ、性器と同じように快感を教え込んだ穴は、私の男根をすんなりと受け入れた。
「はぁっ、うぅぅ。すごい、チンポぉ、かたいのぉ……♡　おしりが、広がってぇ……♡」
狭い肉の壁を押し広げ、私の肉棒は焔の尻を蹂躙する。
女陰とは違うキツい圧迫感に包み込まれた肉竿を、今度はゆっくりと引いていく。
「おおっ、おっ、うぅ、んぅぅぅぅ♡」
焔は声をあげる。
発情期の雌猫のような嬌声は、私の肉棒の動きに合わせて大きくなっていく。
「いっ、いいいっ♡　おおおおっ、おぉぉ、んいいいいいっ♡」
焔の獣の声は、私の肉棒をいっそう固くする。
元くノ一の、下品なまでにひたすら快楽を享受する姿を見せつけられた私は、興奮を煽られ、彼女の揺れる尻を叩いた。
「いっ!?　あっ、ひいいいい!?」
痛みと乾いた音に、焔の締め付けが強くなった。
調教の末、開発され抜いた焔の身体は痛みであっても快感に変化する。
焔の尻をえぐってやるのも忘れない。
肉棒の抽送を拒むような締め付けの穴に負けぬよう、こちらも強く腰を引き、また押し入れる。
「おおっ、んんんっ♡　ひぐっ、いくっ、ひいいいいい！」
何度も何度も尻をはたく。
その度に焔は喘ぎ、快楽に背筋を震わせていた。
私は更に快楽を求め、腰の動きを早くする。
「おおおおっ、んんぅぅっ。これぇ、おかしく、なるぅ……♡　おしり、

きもちよすぎるぅ♡」
焔の手や足から力が抜け、その場に倒れそうになる。
勝手に座ろうとするなんて、我慢が出来ない駄犬である。
だがまあ、たまには甘えさせてやるのも悪くない。
立っていられぬというのなら寝かせてやろう。
私は頭を掴み、焔の身体を硬い床の上に押しつけた。
「んぅ!? ……いっ、おおっ、んんぅぅ!!」
うつ伏せのまま、轢かれた蛙のように足を広げ、焔は私に犯され始めた。
弛緩した手足を投げ出し、穴という穴から体液を垂れ流す。
実にだらしのない格好だ。
最早焔は、私に穴を犯されるだけの肉人形になっていた。
「おっ、おおおおおおおっ♡ いひ、いひぅ……、いくっ、いくの、と、とまんにゃいいいぃ♡」
乱雑に犯され焔の雌は最高に悦んでいた。
ぐりぐりと尻の穴をほじられ、息も出来ぬほど身体を揺さぶられる。
私という雄に屈服している焔は恥辱と痛苦にまみれた性行であっても、その全てを快楽として貪り、喰らう。
出会った頃の抜き身の刃のような鋭さを持つ焔という女など、もうどこにもいないのだと。
その姿を見て改めて実感した私の雄も、これ以上なく昂っていた。
焔を犯していた私の男根に熱が集まっていく。
「お、おおっ♡ く、くるっ。せぃえき、あついのがぁ、またでてくるっ」
私が果てそうなのを尻の中で感じた焔は、更に尻の穴を締め付けてきた。
流石にこれには耐えられそうにない。
焔の頭を指で掴み、これ以上ないほどまで奥へと肉棒を突き入れ、その尻穴に種付けをした。
「いいいいいっ、お、おおおっ♡ いく、いくいくいくい

くううううう!?」
びゅるびゅると熱い精が焔のナカへと飛び出した。
身体の中に溜まった熱が抜けていく。
頭が真っ白な快楽に塗り潰された。
女の穴に己の情欲を吐き出すこの瞬間、この一瞬が堪らない。
空になるまでゆっくりと精液を吐き出した私は、焔の尻から肉棒を抜く。
こぽり、と空気と一緒に空いたままの穴から精液が流れ出す。
「あ、ひぃ……。お、おおっ……♡」
言葉を発する余裕も焔にはのこっていないようだ。
身体に残る快楽の余韻に浸りながら、ちょろちょろとだらしなく失禁していた。

●●

「……まったく。少しは手加減してくれよ。危うく一晩中あのままになるとこだったじゃないか」
湯船の中。
私の膝の上に乗った焔は、苦笑いを浮かべていた。
肛門性行の後。
焔が意識を取り戻すまでかなりの時間を要した。
その事に苦言を呈しているのだろう。
反省してます。と答えると、焔は太ももで私の陰茎を挟んできた。
「なら早く、次しよう。ほらほら、おっきくしてくれ」
私も本日三発目である。
回復まで時間がかかっている。
が、そんなことは火のついた焔には関係がないようだ。
私が開発した女は底知れぬ欲を隠そうともしない淫魔であったのかも知れない。
もう少し淑やかに調教すればよかった。
そう後悔する私の顔を、焔の情欲に血走った瞳が覗き込んだ。

「お前が悪いんだぞ？　私にこんな気持ちいいこと教えたんだから……♡」

くノ一調教日記・雅緋『追記』

「んっ、ちゅぅ、ちゅぴ……」
女は一心不乱に私を求めていた。
熱をもった舌が私の肉棒に絡まる。
膨らんだ陰茎を喉元まで咥え込み、更に熱い液体を搾りだそうとしていた。
目を細め必死に私の先走りの汁を飲んでいる女の名前は雅緋(みやび)。
元、夜の闇に紛れ暗躍していた忍である。
「んんっ……。ぷっ、はぁ……。ちゅぅぅ」
雅緋が持っていた屈強な矜持を叩き潰すため、私は徹底的に彼女に快楽を叩き込んだ。
その末にくノ一は、未知の快感に溺れ、私の従順な雌となった。
雄に媚び、精の匂いに股を濡らし、男の快楽を至上の悦びとする卑しい女だ。
「んっ、ぐぷっ……。ちゅ、ちゅぴっ」
初めて顔を会わせた時の背筋が凍るような鋭い視線は、もうすっかり蕩けていた。
主人であり彼女にとって唯一の男である私に全力で奉仕するその姿に、戦士であった頃の面影など無い。
今の雅緋は心も身体も、快楽によって調教されきった奴隷である。
「ぷはぁ……、どうだ、きもちいいか？」
私は雅緋の頭を撫でる。
色が抜け落ちた白い髪に指を通すと、雅緋は嬉しそうにはにかんだ。
「ふふっ。もっときもちよく、してやるからな……」
頬を紅潮させた雅緋は、愛しげな眼差しを起立した肉棒に向けながら、露出していた大きな乳房で竿を挟んだ。
唾液で濡れていた男根が、柔らかな雅緋の白い乳房に包み込まれ

る。
「んんっ、ちゅっ……」
雅緋の唇が彼女の谷間からはみ出た亀頭にキスをする。
今から奉仕をするという合図だ。
鈴口から出た先走りの汁を舌で舐め、雅緋の口腔が再び肉棒を咥えた。
「ちゅるっ、ちゅぅ……」
雅緋の両手が動き出す。
乳房に挟んだ私の肉棒に圧迫しつつ、上下にしごき始めた。
柔らかな乳房の熱が私を蕩けさせる。
狭められた乳圧がなんとも心地いい。
雅緋は更に快楽を吐き出す亀頭を口に含み、舌と唇を使って愛撫してきた。
ちろちろと雅緋の舌の先が、私の尿道に入ってこようとする。
亀頭の穴を丁寧に舐め、噴き出す汁を一滴たりとも逃さぬよう、雅緋は口を搾めた。
「ちゅぅぅ、じゅっ。ちゅぽ、ちゅぅぅ」
雅緋の乳房の中で与え続けられる快楽に、私は小さく呻いてしまった。
恥も外聞もなく、精を刺激してくる雅緋の頭を撫でてやる。
よくここまで上達したものだ。
ただ女として使い続けた雅緋の一流の娼婦すら凌ぐその技量を前にして、私は早くも子種を吐き出しそうになっていた。
「んんっ……。ちゅぅぅ、ちぅるぅ。……らせぇ、ちんぽぉ……。ちゅるるっ……。いつもの、あちゅぃのぉ……。はやくぅ♡」
私の絶頂を察知した雅緋の愛撫が激しくなる。
私の皮膚と雅緋の乳がぶつかり乾いた音を立てる。
雅緋の舌が容赦なく私の亀頭を責め立てる。
苛烈な雅緋の愛撫を受け私はあえなく射精した。
「ん、んんんっ……！　ちゅぅぅぅぅぅぅ……♡」
どくどくと脈打つ肉棒を、雅緋は嬉しげに咥えていた。

勢いよく飛び出す精液に舌鼓を打ちつつも、両手で挟んだ乳房を圧迫することを忘れない。
尿道の奥からしっかりと、一滴残らず搾り出すように。
雅緋は愛撫を続けていた。
射精後の鋭敏になった男根を責められると、精液の放出は止まらなくなる。
雅緋の頬を膨らますほど大量の精液を吐き出した私は、口を閉じる雅緋に指示を出す。
「んっ……。んぇぇ……」
雅緋は私の指示を守って口腔を見せてきた。
雅緋の口の中には溢れんばかりの精液が溜まっていた。
時折舌で白濁の塊を転がし、雅緋は私の指示に待っている。
「んんっ、んっ。……ちゅるぅぅ」
雅緋の頭を撫でながら、私は精液を飲み込むように言った。
雅緋は躊躇いなく、口の中に吐き出された全てを飲み込む。
「ぷっ、はぁ。……はぁ、はぁ。まだ、もっとぉ……♡」
雅緋の唇が私の亀頭に戻った。
まだまだ足りないようだ。このままでは打ち止めまで、雅緋は私の肉棒をしゃぶり続けるだろう。
ひたすら口で貪られるのも悪い気はしないが、雅緋の身体を余すところなく味わいたい私は、彼女に待てを言い放つ。
夜はまだまだ長いのだ。
ゆっくりと楽しむことにしよう。

●●

「ど、どうだろう。似合う、だろうか？」
雅緋は不安そうに尋ねてきた。
今身に付けている扇情的な下着について、感想を求めているのだろう。
黒いレースの紐は、雅緋の恥部を最低限しか隠していない、下着と

呼んでもいいのか疑問に思う代物だ。
大きな乳輪は小さな布地に隠れきれておらず、臀部は殆んど丸出しになっている。
下着としての機能などほとんど無さそうな男を誘うだけの出で立ちだ。
しかしてその効果は抜群で、雅緋の匂い立つ色香が、更に強調されている。
私は是の返答と共に、反り立つ剛直を雅緋に見せつけた。
「す、凄いな。さっき出したのに、もう……」
私の肉棒を見て、雅緋はうっとりと瞳を蕩けさせている。
お前の格好がそうさせたのだ。とベッドの上に雅緋を押し倒す。
「あっ……♡　……ふふっ、嬉しいぞ。私を見て、こんなに固くしてくれたのだな……♡」
白いシーツの上。
私は雅緋を組み敷いた。
雅緋は股を開き、指で下着をずらして、私の男根を受け入れる為だけに濡れている女陰を開く。
「ああ……。はやく、私を犯して、女にしてくれ」
雅緋は私に懇願する。
情欲に濡れた瞳。熱を孕んだ吐息。
欲情し男に媚びるその表情。
雅緋の中の女も昂っている。
「あ、ああっ。きた、ちんぽ、きたぁ……」
雅緋の女陰に私の男根を軽く押し当てる。
挿入する前に、今からぐちゃぐちゃに犯してやることを知らせてやると、雅緋は喜悦に身体を震わせた。
「んんっ、あっ……♡　はいっ、てぇ……きた」
私は少しずつ腰を沈めていった。
肉棒が徐々に雅緋の身体を穿っていく。
汁気に満ちた膣内は雅緋の体温で熱を帯びている。
硬い竿に雅緋の肉が食らいつき、快楽とその先にある精を求め始め

た。
「いっ、いいぃ。あっ、んんぅ……♡」
雅緋の表情はまさに夢見心地といった具合に蕩けていた。
雌の穴を埋める雄の感触を余すことなく味わえるよう、雅緋の両足が私の腰へ組み付いてきた。
まだまだ性を吐き出すのには時間がかかる。
しかしその時を決して逃さない、必ず中で精を受け止めるのだと。
雅緋は私の身体に自らの肢体を密着させる。
「あ、んっ。ああ、あっ。すきっ……、しゅきぃ……♡」
雅緋の鼻の先と私の鼻の頭が触れあう。
顔を近づけ、互いの息づかいを感じながら、下半身で熱を交わらせる。
豊満な乳房は私の胸板で潰され、動く度整った型を歪ませる。
分厚い脂肪の塊を越えて、組み敷く雅緋心臓の鼓動は私までしっかり届いた。
「はぁ、はぁぁ……。ん、んぅ……、あっ、んんっ……♡」
女として男に犯される。
雅緋は私に肉欲を求めた。
今まで女扱いされてこなかった反動が、忍の運命と諦めていた女の悦びが、彼女をより貪欲にさせるのだろう。
顔を見ながら、肌をくっつけ合わせながらする交尾が、雅緋の女を昂らせる。
身体全体を揺らしながら快楽を送ってやれば、雅緋は可愛らしく絶頂した。
その様を楽しみつつ、私も雅緋の肉体を貪ってやる。
「すきぃ、すき、んっ、あぁぁ……！」
腰の動きは段々と早くなる。
絶頂する度締まる雅緋の膣に快楽を与え続けられ、私の限界もどんどん近づいていく。
「あっ、ああっ、い、いぃ……！　らしてぇ……、せぃえきぃ、いっぱいぃ……。だしてくれぇ……♡」

雅緋は更に身体を固く結んできた。
私の腰がどこかに逃げないよう、柔らかな肉を押し付けてくる。
そのいじらしい姿を見て、私の猛りはピークに達した。
「ふっ、くうううっ……！　きたぁ、せぃえきぃ、きたぁぁ……♡」
こちらも雅緋に身体を押しつ、一番奥へ種付けしてやる。
どろどろと熱い精液が子宮に流れ込む度雅緋は絶頂する。
雅緋の膣は尚も射精を促すよう蠢いていた。
一滴残らず搾り取り、私の子を孕むのだと。滾る雅緋の女陰は私の男根を離してくれない。
「い、いぃ。ふぅ、ふぅぅ。あっ、ついぃぃ……♡」
お互の脈動が治まる。
長い時間がかかった。
絶頂の余韻が猛烈な脱力を生み、結ばれていた身体が解ける。
「はぁ、はぁ。はぁっ……♡　んんっ……」
力の抜けた肉棒を雅緋の秘所から引き抜く。
空いた穴は塞がらず、中から白濁の塊が零れ出していた。

●●

「あ、ああっ！　もっ、とぉ……！　もっと、してぇ……♡」
部屋の中は熱気と、男と女の交わる匂いが充満していた。
長い夜。お互いの欲は衰えず、何度も何度も身体を貪った。
ベッドのシーツのシミは数え切れない。
どちらのものとも解らない体液で濡れている。
私はうつ伏せになっている雅緋を後ろから犯していたいた。
豊かな臀部に腰を打ち付け、喘ぎと悲鳴が混ざった声を聞きながら、雅緋の首筋を舐める。
「おっ、あぁっ、おおぉっ、うっ、うぅぅっ……♡」
嬌声は言葉にならなくなっていた。
荒々しく息を吐く。口から出た空気の塊が音を作って鼓膜を揺らしている。

汗で湿った皮膚は、相手の肌に接吻をするように吸い付き、強引な腰の動きで無理やり引き離される。
そしてまた繰り返し。どちらかが果てても、このまぐわいは終わらない。
「いっ、くぅぅぅっ、おっ、おおぉっ、あっ、ふぅぅぅぅぅ……♡」
雅緋は絶頂し、熱でふやけた膣に力が入る。
精液と愛液がかき混ぜられた雅緋の秘所は、未だ貪欲に私を求めている。
腰を振る度糸を引き、泡立つ体液を吐き出す雅緋の穴を、私は一心不乱に責め立てていた。
「いっ、ああっ。あ、あぅ、あん。おっ、おおぉっ、ぅぅぅっ……♡」
絶頂の余韻に浸らせず、快楽を与えられ、雅緋の顔はぐちゃぐちゃになっていた。
枕に押し付けられ、半分だけ見えていた顔には、普段の雅緋の凛然たる雰囲気など何処にもない。
快感に脳を犯され、ただひたすら男を求める蕩けた女の顔である。
「んんぅっ……。あっ……、ふぅぅぅぅ、おおぉ、おおおっ♡」
くぐもった声は、膣に挟まる私の肉棒を震わせた。
雅緋の絶頂は止まらない。
何度も連続で昇天しても、私が果てるまで陰茎をきゅうきゅうと締め付ける。
「はっ、はっ、ぁぁあっ。おおお、いぐっ♡　また、いくぅぅぅぅっ♡」
下品な声で喘ぐ雅緋に負け、私も精を吐き出した。
本日何度もになるか。数えるのも忘れ射精の快楽に耽った。
「ひっ、いいいいいっ、あっぁぁあっぁぁぁあっ♡」
雅緋の白い背中に自らの身を重ね、種を押し付けるように全て吐き出す。
指と指を絡め、伸びきった足を足で押さえ、雅緋の横顔を唇で吸う。
雅緋の全ては私のものである、と。
私の身体の全てを使って刻み込む。

「うん、んんっ、んちゅうっ……んっ、ふうぅ♡」
流石にこれで打ち止めだった。
力が入りそうにない。
最後の力を振り絞り、私は雅緋の上から退いてベッドに寝転がった。